

史料と伊能図

伊能忠敬

研究

二〇〇五年 第四十号



伊能忠敬研究会

米國議會圖書館藏

伊能大図八一号の部分「善光寺・松代」

善光寺には第三次(羽越)測量と、第八次(九州第二次)のそれぞれ帰途に立ち寄つた。第三次は直江津から善光寺、長野村を経て、丹波島の渡しで犀川を渡り、篠ノ井、上田と北国街道の本筋を測り、第八次は飛騨から野麦峠を越えて木曾路に入り、洗馬宿で中山道と分けて、松本、麻績を経由、篠ノ井追分まで北国街道本筋に合流する北国西街道(善光寺道)を北上して長野に至つた。

その後、長野の北東、新町宿から飯山に向かい、反転して千曲川の東側を松代に向かう。途中、千曲川綱取渡しのある幅百間余りを、測速術によつて測つたと記す。須坂の南西、幸高村付近などに水無川があると測量日記に記載されている。単色の図版では読みとれないが、このあたりの流路は黄色で表現されている。

犀川合流点の描写も際立つが、ここには寄っていない。対岸の測線が岸近くまで入って、この合流点への視線を感じさせる。犀川の南岸、合流点から少し奥が川中島である。

(題字は伊能忠敬の筆跡)

(鈴木純子)

トピックス

日本大学文理学部における伊能図展の特色

駿府訪問伝えた地元古文書

伊能測量二百年から

天道幽玄

新緑エッセー

農業は景観維持と食料確保の公務員だ

芳名録より

菅波さんお世話になりました

研究ノート

忠敬・その頃世界は

忠敬墓碑銘の読み下し文

伊能古文書教室『旌門金鏡類錄』(七)

静岡の御注進之覚

解説

伊能大図とアイヌ語地名研究

氷上郡の農民が拠出した金

公儀天文方筑前御領内測量ノ節萬覺書

続・忠敬未公開書簡(二) 渡辺清蔵

西蝦夷地測量断念の背景

伊能忠敬と間宮林蔵

師弟の絆が蝦夷地の地図完成（一）

忠敬談話室だより

ホームページがリニューアル

伊能ウォークの八人再結集

お知らせ
旅行案内 一 忠敬の故郷・佐原

井村 博宣	一	静岡新聞	二	加藤 忠三	三	河北新報	一五	渡辺 一郎	四	伊能 陽子	一〇	柏木 隆雄	八	植田 浩一	一二	小島 一仁	一六	加藤 忠三	二二	佐久間達夫	二四	井口 利夫	二八	横川淳一郎	三四	河島 悦子	三八	伊藤 栄子	四二	堀江 敏夫	四九	佐久間達夫	五六	編集部	六三	朝日新聞	六三	事務局	六四
-------	---	------	---	-------	---	------	----	-------	---	-------	----	-------	---	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-----	----	------	----	-----	----

日本大学文理学部における伊能図展の特色

井村 博宣

本稿では、2004年12月6日〜23日にかけて、日本大学文理学部が地域の文化・学術の拠点機能を果たすべく開催した伊能図展「伊能図の世界 あるくはかる つくる」伊能忠敬の日本図展」の特色について解説する。

伊能図展の最大の特色は、①伊能図レプリカ展と②同実物展、③伊能図・伊能忠敬に関する学術講演会を三本柱とする、本格的総合的な学術展である（参加は自由・無料）。

レプリカ展では、従来のフロアー展（大・小図展示）に中・江戸図を加え全ての伊能図を揃えたほか、新しい試みとして最新のITを使い、富士山・江戸の風景等を体験できるバーチャル伊能図を作成し公開した。展示では、初めにイブ・ペイレ氏旧蔵（日本写真印刷現蔵）の中図より導線法・交合法等の伊能図の基本的な特徴を捉え、次に別室二階で大図と1/5万地形図を比較して伊能図の正確さを確かめながら、一階の床面全体（38m×61・5m）に日本列島を象って敷き詰められた大図を鳥瞰（三辺から。縮尺よりスペースシャトルの高度に相当）してスケールの大きさを体感した後、一階へ下りて大図上を自由に歩き、間近に見て伊能図の素晴らしさを肌で感じられるよう動線・展示を工夫した。

実物展は、貴重な文化財を扱うため、博物館相当施設の設備を持つ図書館展示ホールを使用した。ここでは、まず伊能家・日本学士院・海上保安庁海洋情報部が所蔵する文書より、忠敬の人物像や伊能図の

作成から明治期の活用等の大きな流れを捉えた後、伊能家所蔵の下図や歴博と海洋情報部が所蔵する大図14枚（アメリカ大図の欠図7枚を含む）より伊能図の製作行程や旧海軍が西欧の技術を導入する当時の様子が読み取れるよう展示した。なお、忠敬の緻密かつ膨大な仕事量を視覚的（ボリューム）に理解できるように日本学士院所蔵の山嶋方位記・測量日記は全巻同時展示したほか、大図展示では地図を傷付けないようにオリジナルの亚克力製し型とめ具を岡村製作所に依頼し作成した。

学術講演会は、初日と毎土日曜日にあるく・はかる・つくるをテーマに、各分野の専門家による講演を行い、実物展と共に研究者の関心にも応えられる内容とし、ひいては娯楽的要素を持つ映画上映（伊能忠敬「子午線の夢」毎金曜日）や歩測体験（毎土日曜日）等の企画と一対にして、伊能図展全体を幅広い階層の人々の関心と呼ぶようにした。

これらのほか、文理学部では重要な文化財である伊能家所蔵恒星図3枚の修復と、娯楽文化への伊能図の再評価を求める情報発信として神田愛山師に依頼して新作の講談「伊能忠敬一代記」を創作する等、総合的な文化・学術の拠点としての役割を果たした。

（いむら ひろのぶ・日本大学文理学部助教授）



駿府訪問伝えた地元古文書



古文書や下図を前に、当時の測量に思いをはせる加藤さん＝静岡市葵区銭座町

加藤さんは長年、ボーイスカウト活動を通して地図に親しんできた。二〇〇〇年十二月、伊能の足跡をたどるウォークに参加したことがきっかけで伊能研の渡辺二郎会長（の図）のコピーを入手した。当時と知り合い、渡辺さん（伊能忠敬は寛政十二年（一八〇〇年）、私費で全国測量

江戸時代に国内最初の近代的日本地図作成を手掛けた伊能忠敬が、駿府（静岡市）周辺を測量してから今年四月で二百年。伊能が測量に訪れたと在地元の村々に伝えている古文書が静岡市駿河区広野に残り、伊能自身が書いた測量日記の記述などとはほぼ一致することが、伊能忠敬研究会（本部東京、会員の加藤忠三さん（六二）同市葵区銭座町）によって確認された。同種の古文書は県内では珍しいといひ、加藤さんは「こうした資料を丹念に重ね合わせることで、地元での測量の実態がより分かる」と話している。

伊能忠敬の「日記」と一致

測量から 200 年 静岡の歴史家が確認

中村さんは「御証文」という言葉や測量隊の顔触れなどから第五次測量のものだと推測していたが、加藤さんは東京の専門家に分析を依頼。自らも伊能日記などと照らし合わせて確認作業を行った。天候の影響などで、一行が実際に江尻に宿泊したのは新暦の四月上旬に当たる三月七八日、丸子宿は九、十日。江尻から丸子まで二班に分かれて測量を行い、伊能は江尻から府中までを担当したといひ。

を開始。文化二年（一八〇五年）の第五次測量から幕府直轄の事業となった。下図はこの第五次測量当時のものとみられ、加藤さんはこれに対応する地元資料があるのでは、と仕事の合間を縫って調査してきた。

「御証文」と書かれた古文書は、旧広野村の有力者が遺した広野区有文書の中にあリ、駿河古文書会が五年前に内容を確かめた。測量隊が次の測量先の村々にあてた「先触れ」で、同会の中村典副会長（五七）によると、「江戸を二月十五日に出立し、江尻（静岡市清水区）・丸子の各宿に三月五、六日に宿泊する予定だから各宿は人馬その他を用意しておくように」との内容といひ。

加藤忠三さんの「御注進之覚」の詳細は 22 頁に掲載いたしました。

伊能測量二百年から

加藤 忠三

四月八日個人的に静岡五次の測量から二百年を記念して下図を使
つて歩きました。同行したのは娘の嫁ぎ先の両親とその友人で、全部
で四人です。いつもボーイスカウトで子供たちと歩くので、大人と歩
くのは初めてです。それでも伊能忠敬のこと、地図のこと、江戸時代
のことなど、話が盛り上がりながらの三時間でした。昼食のとき今度
は下図にある清水から静岡まで歩こうと言うようになりました。勉強
をかねたウォークがどんなものかを知ってもらうよい機会だったよう
に思います。下の地図はそのとき使った1/25000地形図に下図
を貼り付けた資料です。

右の静岡新聞の写真の中で私の左手前にあるコンパスがあります。
以前からプラスチックのシルバコンパスを使っていたのですが、昔の
ものがほしくなり、インターネットのオークションで手に入れたもの
です。

コンパスの中に刻まれたT・TAMAYAという文字から現在のタ
マヤ計測システムというところに問い合わせたところ、一九五〇年こ
ろのものだと言うことでした。これを調べていくうちに伊能忠敬のコ
ンパスを作ったのが大野弥三郎規周で、彼の作った測量機器を販売し
ていたのが玉屋というものがわかりました。しかしこれが私の手に入
れたコンパスを製作したタマヤ計測システムと同じかどうかは不明と
のこと。これをきっかけに測量機器も調べ始めています。



農業は景観維持と食料確保の公務員だ

— スイスで逢ったアラビア人農業学校長の意見 —

渡辺 一郎

二〇〇一年九月七日から二一日まで一四日間、スイスを旅行したときのことであるが、電車のなかでアラビア人から流暢な日本語で話しかけられてビックリしたことがある。ふと思いついたので、旅すればこそその出来事の一つとして記しておきたい。

勿論個人旅行だったが、イタリアのミラノ空港について電車でスイスのルガノまで行き、ベルニナ特急バスと銘を打ったポスト・バスでテイラノに出て、ベルニナ特急列車でサン・モリッツに着いた。標高一七七四米の湖畔の観光地だ。市内バスがあり、ホテル、商店が多数ある。山の中とはとても思えないところだ。

すぐ近くのピッツ・メイヤーという展望台に、登山電車とロープウェイを二回乗り継いで登る。標高三〇二五米、頂上は零下一〇度だった。雲の中なので周辺しか見えない。客は数人しかいなかった。それでも山頂ハウスの食堂はやっており、ケーブルは運行している。よくやっているものと感心した。

サン・モリッツを、九・二五の氷河特急（グレイシャー・エクスプレス）で発ち、ツエルマットに向かう。着いたのは一七・〇〇だったから、七時間半も列車にいたことになる。特急などとは言えない速さであるが退屈しない。山越えばかりで、かつ単線なので待ち合わせが多いが、周囲の変化に富んだ美しい風景のためだったろう。食堂車に

は一一・〇〇から一二・三〇までいたから、正味は六時間かも知れない。一等車の喫煙室一二席分のブロックには他の客がいなかったから室内は専用でまことに快適だった。

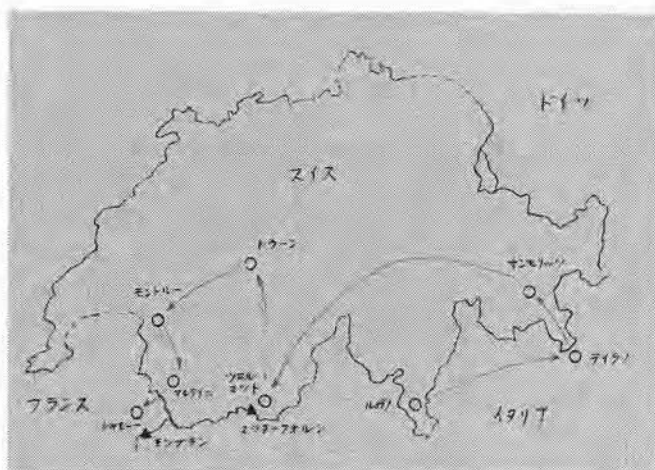
一等車は一両で、一列が一席と二席の三人分、対向しているから六席が単位で、一車輛は六ブロックからなる。中央の喫煙一二席と禁煙二四席の境界にはガラスの仕切りがある。客がいないので、我々は喫煙ブロックを独占していたのである。

しかし、よくもこのような山間を縫う鉄道を作ったものだと思う。急勾配、急カーブ、トンネル、ループと山岳鉄道の展示会のようなもの。室内は綺麗でよく見る観光写真の通りである。鉄道会社三社の路線を走り抜けるので、その都度検札があり、車内販売係りが変わるのも面白い。

ところで、谷間の村々は一体何によって生計を立てているのだろう。線路より遥かな山の上まで、牧草地が続く、綺麗な農家の家々が見える。放牧はされているが、そのくらいではあのような立派な家々を保持できないと思う。その場所まで、行くだけでも大変と思われる高所に村があり教会が見える。

ツエルマットは、いわずと知れたマッターホルンの麓である。高級ホテルからエコノミーまでホテルと土産物屋がギッシリ連なっている。ガソリン車は乗り入れ禁止で、遙か手前で駐車させ、バスで乗り込むようになっている。我々のホテルは四つ☆なのだが、窓から斜めにマッターホルンが見えるいい位置だった。

翌日は晴天なので、登山電車でゴルナグラード展望台へ。四輛十一輦増結の満員の登山電車は急坂を約四〇分で登る。展望台は人々々々。しかし、マッターホルンの雄姿は目の前である。ほとんどの人はここから帰るが、我々は少し差をつけようと、さらにケーブルを二本乗り



継いでストックンホルム
(三五三二米) 展望台に
登る。この客は一〇人
くらいだった。晴天なの
で暖かく三〇〇〇米を超
える山頂とは思えない。
運転手にビューポイント
を聞き、人が少ないから
思う存分マッターホルン
を堪能した。ゴミがなく
清潔で、特別な水洗トイ
レもある別世界。帰りの
ケーブルは我々二人だけ
だった。

このあとはインター
ラーケンとトゥーン湖を
挟んで対面する古都のト
ウーン、それからモントルーと泊まりを重ねる。モントルーは五つ☆
の豪華ホテルの安い部屋に泊まったが、クラシックカーの展示即売会
をやっていた。一千万円以上の超高額の車を百台くらい並べ、値札が
ついて、出品者のオウナーが説明に出ており、買い手が交渉をしてい
る。大変高価な眼の保養であった。

市街を歩いたあと、日帰りでフランス領に入りモンブランの麓のシ
ヤモニーに行くことにし、翌日早く出発した。国鉄でマルチニーまで
行って乗り換える。枝線なのに車両は豪華だった。スイス・レイルパ
スはフランス領には通用しないので、切符はどこで買うのかと聞く。

途中の駅で買ってもいいし、車掌に払ってもいいとのことだったので
黙って乗る。途中、国境駅でフランス側の車両に乗り換えたが、入国
管理や税関はなく車掌が廻ってくる気配もなかった。あとで払っても
いいだろうと、そのまま乗っているうちにシャモニーの駅に着く。こ
この車中で一人旅の日本人女性に出会い、マンハッタンのテロ事件を
知った。「親からは、だから早く帰れといわれているが、スイスとアメ
リカは関係ないから旅を続けている」とのことだった。

駅に着くと幾らもないお客は、係員のいない出口から三々五々出
てゆく。乗車券購入は自己申告制だった。長距離列車では検札がある
が近距離ではこんなことらしい。駅のインフォメーションでどこへい
ったらよいかと聞くと、イギュー・デ・ミギーというロープウェイに乗
れといわれる。観光地なので土産物屋さんホテルが賑やかに並び、
各国の観光客が行き交う町並みを歩いてゆくと、乗り口はすぐわかつ
た。乗車券は往復シニア料金で四千円くらいだったと思う。そして建
物のなかには人々々の大行列だった。

こんなに大勢が乗れるのかと思っていたが、降りてきたゴンドラの
超大型にはビックリした。二〇〇人以上がすし詰めになって登り始め
る。上が見えない遥かな山頂をめざして岩肌を登る。ギュー詰めめ
のゴンドラが落ちたら大事故になるな、と恐ろしかったが周囲の人たちは
平気な顔をして乗っていた。途中手前の峰でケーブルを乗り換え、二
〇分くらいして展望台駅に着く。この場所は双峰の山のでっぺんなの
だが、山頂全体に一塊のように建物があり、連絡通路は地下、一番高
い展望塔にはエレベーターで登る。山頂にこんな大規模施設をどうや
って作ったのだらうと、つくづく考えてしまう。

屋上からの展望は形容できないくらいすばらしい。快晴だったので、
モンブランを始め世界の屋根アルプスの連山を一望することができた。

この下をモンブラン・トンネルが通っており、過日イタリア側からトンネル入り口までいったことがあるが、日程に余裕がなく先送りしていたものである。これで、マッターホルン、モンブランを近傍から眺めたことになる。歩く道も完備しており、歩いて登った人もいたが、我々には手が届かないことである。この辺で我慢するしか仕方がない。

その帰り道、逆ルートでモントルーにもどろうとした。直通電車だったが国境駅では長いこと対向電車を待たされた（この辺りは勿論単線である）。何とはなしに簡素な駅舎を眺めていると黄色なバスがついた。スイスで黄色いバスといえばポストバスである。鉄道網を補強して国中をくまなくカバーしている。ここにもポストバスが来ているな、と眺めていた。客は数人だったが、そのうちの一人が駅に入り、電車に向かって悠然と歩いてくる。バスはこの電車に連絡して運行していたようだ。

この人は発車時間を承知しているらしく、慌てないでゆっくり歩いて我々と同じ車両に乗り込み、すぐ近くの席に腰掛けた。気に留めなかったが、妻がポストバスは隅々まで走っているのですねと話し始める。我々はルガノからポストバスで山越えをして、サン・モリッツまで出て、そこから氷河特急など乗り継いでスイスを縦断しモントルーに来ていたから、馴染みがあつたのだ。

すると、キツカケを待つていたように、その人は流暢な日本語で話しかけてきた。ポストバスから始まって、スイスのいろいろなことに話がおよんだ。アラビア人なのだけれどスイスに住み、農業学校の校長をしていたという。日本語を上手に話し、我々の話を理解できるのだが、日本には来たことがないという。日本にいたことがなくてこんなに上手に話すのには驚いた。外国を歩いていると、日本語で話しか

けられることはときどきある。ストックホルムのドロットル宮殿を観光していたとき、元海軍で横須賀に駐留していたアメリカ人とか、西ドイツの車中であつたパキスタン人など、いずれも日本にいたことがあつて、日本人がなつかしいから、話しかけたようである。

このアラビア人は日本語を覚えようとして習つたもので、八カ国語を話すという。さすがはスイスと感心した。車内に日本人がいたので、日本語のおさらいに話しかけたらしい。六四歳、農業の教員で農業学校の校長をしていた。年金を一年繰り上げて貰っている。自身で果樹園を持ち、牛も二七頭飼育しているという。

おいしそうな「いちじく」があつたので買って来たといつて、「いちじく」を貰つて食べた。ルクセンブルグの銀行にいったとき聞いたことがあるが、こちらでは「オフイサー」として勤めるには、英、独、仏語は必須らしいから、母国語を含めると四つは最低ということになる。それにしても日本語を入れて八つは多いだろう。

スイスの美しさをほめ、あのような高い山の上まで牧草をそだて、放牧しても仕事にならないのではないかと尋ねたところ、彼は「農地は三年手入れをしなければ、ジャングルになってしまう。農業は景観維持と食物の最低限を確保する公務員だ」「日本に行ったことはないが、美しい国土があり、日本に関心を持つている外国人は多い。農業をもっと大事にすべきだ」という。

言われて見れば誠にもっともで、農業がなくなったスイス、清潔でなくなったスイスでは、観光なんて考えられないだろう。たしかにビニールハウスなど車窓から見当たらない。経済効率優先で農業が行われていないことが良くわかる。

それから「ユーロへの切り替えを控えて、ヨーロッパ中のアングラ・マネーがスイスに流れ込んでいる。日本からも沢山お金が来てい



マッターホルンと登山電車

「とも話していた。確かに世界の金融センターとして資金を預かり運用するという仕事ではナンバーワンだろう。そして他にも化学工業、精密機械等では世界規模の企業が存在する。

その一方で農業を守って、国土環境の保全と食料の最低保障をおこない、観光にも精を出すということらしい。日本にとっては耳の痛い、考えなければならぬ指摘であった。

また他方で、アングラ・マネーが音を立ててスイスに流れこんでいるという話を聴いて、なるほど、スイスがEUに加入しない別の意味もあるのかと、妙なところで金融立国スイスの国家としての深い読みを感じた。

(前代表理事)



マッターホルンをバックに
ピッツネイヤー展望台 零下10度



氷河特急の食堂車
ミギー展望台



忠敬・その頃世界は

柏木 隆雄

忠敬が隠居を許され、家督を長男の景敬に譲って江戸に出たのが一七九五年（寛政七年）、幕府天文方、高橋至時に弟子入りして天文暦学の学究の道に踏み入った。この頃、エカテリーナ二世統治下のロシアは、フランス革命直後の西ヨーロッパの動向に最大の関心を寄せながらも、国旗「双頭の鷲」の鋭い眼の一方は、日本に向けられていた。

一七七八年（安政七年）には、ロシア船が東蝦夷地のキリタツプに來航し、松前藩に通商を求める。松前藩は、鎖国下でもあり、返答を保留し幕府に伺いを建て、翌年になって再度の申入れを拒否した。

迫る北からの脅威を感じとった幕府は蝦夷地調査に着手。その後のラクスマンの根室來航、近藤重藏の蝦夷地への派遣、東蝦夷地直轄化などの史実をここで縷々述べるつもりはないが、歴史の舞台は着々と整い、われらが主役、忠敬の登場を待っていた。

バステイーユの監獄を民衆が襲ったことが端緒となったフランス革命は一七八九年（寛政元年）、革命の理念となった自由、平等、友愛の人権思想は国境を越えて西ヨーロッパ全域に拡がっていった。

アメリカはひと息早く、「自由」を掲げて独立宣言をし、初代大統領にジョージ・ワシントンが就任していた。

忠敬と同時代を生きたナポレオン・ボナパルテは、一七六九年（明和六年）コルシカ島で生まれた。フランス革命時は二〇才、その年四月一日の日記にこう記している。

「今年は、善男善女にとつて、期待の持てそうなことがいろいろ始まるだろう。これまで幾世紀にもわたった封建的蛮風、政治的奴隸制のあとで、「自由」という言葉が贅沢や上流と無縁だった人々を燃え立たせ、それらの動きに驚きがひろがっている。フランスが大きく変わるとする一方で、われわれ不幸なコルシカ人は、これからいったいどうなっていくのだろう」

フランス革命前後の西ヨーロッパは、各地で「国家統制」の動きが強くなり、国家形成には戦争がともない、結局のところ国家による覇権の獲得と勢力の拡大、侵略や征服のための戦争を生みだした。

ナポレオンはフランス軍に入隊し、青年将校としてイタリア戦線などで数々の戦績を挙げ、その後も華麗な履歴を重ねて、一八〇四年（文化元年）ついにフランス共和国の皇帝の座に着いた。

同時代の楽聖ベートーベンの「英雄交響曲」の逸話は有名である。ベートーベンは音楽家で自由人であったが、革命家に対し、同情と敬意を抱いていた。

一八〇二年（享和二年）一〇月の二通の遺書に認められた絶望感と、信ずる神の無慈悲への呪い。（ハイリゲンシュタットの遺書）

自殺を思いとどまったベートーベンは、自由の戦士、ナポレオンへと傾斜していった。

忠敬にも遺書らしきものが存在する。

（別稿で記述する機会を持ちたい）

日本に触手をのびし始めたロシアは、一七九六年（寛政八年）、カテリーナ二世が亡くなった頃から政情が不安定となっていた。一八〇一年（享和元年）には皇帝パーヴェル一世が暗殺される。

ナポレオンの覇権への侵略はつづき、その矛先は、ロシアへと向つ

た。

一八〇九年（文化六年）ウィーンに入場。ナポレオン、かつての憧れの街ウィーン。そのオーストリア国家を従属させ、一八一一年（文化八年）いよいよロシア侵攻を前に、ロシア戦用の大陸軍を編成した。翌年五月、ロシア戦に出兵、九月には首都モスクワに入場する。

ロシア大陸封鎖令に不服従宣言をし、ナポレオンに最後通告をしたアレキサンドル一世は、徹底抗戦に出た。モスクワを退き、いったんボルガ流域まで撤退したロシア軍は持久戦に持ちこんだ。神風のような冬將軍の到来と兵糧攻めである。十一月十八日付、ナポレオンの手紙、「われわれの立場は悪化した。凍夜とマイナス二〇度の酷寒で、ほとんどすべての馬、つまり三万頭の馬が死んだ。それに、三〇〇門以上の砲とおびただしい数の軍用運搬車を焼き払わねばならなかった。寒さで孤立する兵が増大している。……」。退路を追われ、ナポレオンは這々の体でパリに帰還した。

ロシアとの戦いを機に、ナポレオンの立場は一変した。一八一四年（文化十一年）皇帝位を降され、地中海の孤島エルバ島に流される。ナポレオンとの戦いで焦土化した首都モスクワ、多くの人命と物資を失ったロシアは、その復興にたいへんな日時を要した。

日本からアジア諸国へと勢力圏の拡大政策はひとまず棚上げせざるをえなくなった。

ロシア皇帝エカテリーナ二世の使節アダム・ラクスマンの根室来航以来、幕府は北辺の防備に本腰を入れ、大調査団の派遣、近接する島嶼の確認、沿海地図の作成などの事業を推進した。時流に対応した忠敬の蝦夷地測量は、沿海輿地図の精密な出来栄から、幕命により、蝦夷地にとどまらず日本全国に及ぶ大測量事業となった。

ナポレオンがエルバ島に幽閉され、邯鄲の夢を見ている頃、全ての

測量を終えた忠敬は江戸亀嶋町の地図作業所に於て、最後の筆を措いた。

参考文献 アンドレ・マルロー編「ナポレオン自伝」

小宮正弘訳 朝日新聞社刊

（かしわぎ たかお・柏木幸七子孫、税理士）



ダビッド画 ナポレオンのベルナール峠越え

伊原伊熊家を訪ねた上、

伊能陽子

心よりご冥福をお祈り申し上げます。



郷土史家
菅波 寛さん

土史家、伊賀果敢研究会会員、一津辺手紙を
読ひ金」主幹、岡町にある善茅山記念館の前
議長委員長、善茅山などにまつわる書簡など
の解説や巻頭を以てする第一人者。九一年、善
九郎朝山園記念文化賞を受賞。福山市在住。

あす県内入り 忠敬に学ぶ人生哲学



伊能忠敬が旧廻り、菅茶山と会合したとされる史跡「神辺本陣」＝神辺町三日市で

[illegible]

さて、我々が忠敬から人物像に学ぶべき点は何なのか。まず、自分なりにしっかりと切りした人生哲学を持つこと。二番目に目的に向かって執念と氣力を集中し、猛勉強をすること。三番目に、人間相互の關係を大事にし結集させれば、大きな力となり物事を成せること。四番目には、その道でのハイレベルを目指し、自己満足で終わらないことである。まこと、そうありたいものである。

芳名録 国民新聞社参事 中嶋 氣峰



菅波さんとご子息 98. 5. 16 江戸博にて

大正九年九月十一日予佐原為修養會謹啓
 伊能三郎右衛門君亦同舍肄師之人也君實
 為我國測量術之泰斗忠敬先生之子孫十有
 朝訪君家詳觀先生遺物及日誌書翰並
 大小地圖偉人慧之痕跡可徵也予惻然
 歎曰帝國測量製圖之所今日已失於先生
 內者蓋負于忠敬先生也予多矣予要時
 而南船北馬不暇屏懷初自思亦以盡職業
 矣今予反訪伊能君接顧先生之遺風茫
 然自失正覺努力之不逮及嗚呼定家先
 生之賜也謹書所感以謝偉人之風化焉
 國民新聞社参事 中嶋 氣峰

解読

菅波 寛

大正九年九月十一日、私は佐原へ修養会講演の為に来た。伊能三郎右衛門君もまた同会幹部の一人である。

君は実は我が国測量術の泰斗をなした忠敬先生の子孫である。十二日朝君が家を訪れ、詳しく拝観する先生の遺物および測量日誌、書簡ならびに大小地図。

偉人の苦心の痕跡は歴々と現われている。私は溜め息をついて曰く、

我が国測量の製図の術、今日高く抜きん出て定まっているのは忠敬先生に負うる所大なり。

私はいまの時局を憂い東西奔走し、暇で席を暖めることはない。ひそかに自ら思い、またもってかすかに哀れみ尽さんと。実に今多くのことを顧みて、伊能君を訪れ、先生の遺風に触れ茫然として自らを失ひつつも、努力の積み上げのみと自覚する。

あゝ、これは先生の遺業に触れたお陰だ。謹みて私の所感を書し、偉人の所業に触れた私の心もそれに習うべく感一入で終る。

忠敬墓碑銘の読み下し文

植田 浩一

書家は、文中で近くに同じ字体の頻出するのを避けるようにつとめるらしく、拓本を見ると分かるように、「饑」という字は次の行に再出する時には「饑」という字体になっている。同様な例は、来↓来、躬↓躬、従↓従などに見られる。これらは書家の裁量の範囲に入るのだろう。また、「配」、「記」、「紀」などと、旁がすべて「巳」になっているのは、当時の使われ方で、現用字体の配、記、紀などは戦後の国語政策で統一されたものだと思う。

名著、大谷亮吉編著『伊能忠敬』の伝える忠敬さんの墓碑銘が、墓塔の碑文と違うのは次の三点があげられる(墓塔正面を第一面以下、時計回りに第二、第三、第四面とする)。

第三面二行目 「新自浪速来」の「新」が脱字

第三面十一行目 「寓内」を「寓内」と誤記

第四面九行目 「坤」を「地」と誤記

決定的なのはこの三点だけだが、こまかく字体のことまでとりあげると(カッコ内が墓塔の碑文の字体)、

紋(叙)	號(號)	解(解)	本(本)	塵(塵)
明(明)	關(關)	舉(舉)	錠(錠)	模(模)
奥(奥)	遠(遠)	參(參)	數(數)	嘗(嘗)
喪(喪)	勤(勤)	並(并)	答(答)	囑(囑)
疏(疏)	などがある。			

漢字には、一つの字に本字、同字、俗字、略字、異体字と字体が異なることがあり、厳密に決めつけるのはむずかしいが、墓碑の拓本が手元になく、墓塔から手写するしか手段がなかった場合は、こゝにあげた事例は許容範囲に入れざるを得ない。

大谷亮吉以後の忠敬研究の金字塔的著作である保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』に揭示されている忠敬さんの墓碑銘では、次の二点が墓塔の碑文と違っている(現用字体に置換してある字は除く)。

第二面七行目 「因丐君」の「丐」を「焉」と誤記

第三面十一行目 「寓内」を「寓内」と誤記

ただし、「丐」については、釈文では「因つて君をこうて」と正しく読んでいたので誤植(校正のミス)かもしれない。

結局、保柳著では、「寓内」だけがミスということになる。銘文は漢学の泰斗、佐藤一斎の撰文である。「寓内」はウダイと訓じ、現用語の「宇内」と同じ意だと思ふ。大谷、保柳両著とも採録している「寓内」ではグウナイとしか読めず、辞書(上田万年編『大字典』)にも「寓内」の熟語はない。別の件で陶淵明の「帰去来辞」を調べていたら、「寓形宇内」という語句に出くわした。「形を宇内に寓す」と読み、形は人間の肉体、宇内は天地四方、寓は一時的に身をおくこと、つまり、現世にしばし肉体をおくことという意味だそうである。

こゝに、大谷、保柳両著をとりあげたが、他の研究文は両著の数倍以上の誤写、誤読がある。そのうち、二例だけとりあげてみる。

第四面十行目の「祈寒暑雨」のところで、祈寒の祈は祁に通ずると辞書にあり、祈寒は祁寒と同じで厳寒の意だという。

瘴烟毒霧、瘡を為す能わす
 折寒暑雨、痛を為す能わす

と読むのだと思っていたら、某紀要所載の釈文では「寒暑に雨を折り」と読んでいる。何をか言わんや、という気になった。

もう一つ。第二面十行目に「日州君」という個人名が出てくるが、これを某研究誌所載の文は「月州君」と伝えている。この文は拓本の文字を反転したような体裁だった。さてはすでに拓本があり、「日州君」とした我が調査は杜撰だったかと慌てたが、本物の拓本が発表され、間違いがはつきりした。

鮮明な墓碑銘の拓本は、これからの忠敬墓碑銘研究の必須の資料となろうし、これで前記したような誤伝はなくなるだろうと思う。

東河伊能先生之墓

東河伊能君墓銘并叙

江都 一齋佐藤坦爲文

君、諱は忠敬、字は子齊、伊能氏、東河と號し三郎右衛門と稱え晩くには勘解由と稱す。北總香取郡佐原村の人なり。本姓は神保氏、南總武射郡小堤村の神保貞恒の第三子にして出でて伊能氏を冒す。伊能氏は世、閭の右族たり。其の先は大和高市郡西田郷に出づ。大同中、諱、景能なる者あり、北總香取郡大須賀莊を知め、伊能村に居し因って以て氏とす。子孫蟬聯、其の地を占む。永祿中に至り、諱、景久なる者有り。始めて佐原



東河伊能君墓銘并叙
 江都 一齋佐藤坦爲文
 君諱忠敬字子齊伊能氏號東河稱三郎右衛門晚稱勘解由北總香取郡佐原村人本姓神保氏南總武射郡小堤村神保貞恒之第三子出冒伊能氏伊能氏世爲閭右族其先出於大和高市郡西田郷大同中有諱景能者知北總香取郡大須賀莊居伊能村因以氏爲子孫蟬聯占其地至永祿中有諱景久者始徙佐原天正中爲居民開肆貿易實君九世祖也高祖諱景利曾祖諱昌雄祖諱景慶考諱長由長由無子其配神保氏君之從祖姑也因爲君爲長由不幸歿歿產頗荒君既未嗣慨然以幹蠶爲志所夕電勉務於桑梓家衆古口以躬率先之天明三年開東大藏君爲從私儲賑修鄉里施及旁近村落多所全活六年又饑救之如初地頭津田廿州君並優賞之君好呈冊至寛政六年奉家事於子景敬躬獨來江都爲從事學當時所傳厚法君疑其

に従る。天正中、居民となり肆塵を開き貿易す。實に君が九世の祖なり。高祖は諱、景利、曾祖は諱、昌雄、祖は諱、景慶、考は諱、長由、長由、子無く其の配神保氏は君の從祖姑なり。因つて君に巧うて嗣と爲す。長由、不幸にも蚤に歿し、産、頗る荒る。君、既に來り嗣ぐ。慨然として幹蠱を以て志と爲し、旣夕黽勉、儉素に務め奢靡を禁ず。家衆百口、躬を以てこれに率先す。天明三年、關東大いに饑う。君、爲に私儲を發し郷里を賑貸す。施し旁近の村落に及び全活する所多し。六年、又、饑う。これを救うこと初めの如し。地頭津田日州君、並びにこれを優賞す。君、星曆を好み、寛政六年に至り家事を子景敬に委ね躬獨り江都に來り始めて曆學に従事す。當時、傳うる所の曆法、君、其の合わざる所有るを疑う。徧く曆家に就きこれを質すも猶、未だ釋然とせず。既にして官、會改曆の舉有り。高橋東岡なる者を召し新たに浪速より來る。君、贊を執り往きて見え始めて西洋の曆法を聞く。理精しく数密かにして宿疑乃ち解け遂に舊學を棄てこれに學ぶ。推歩測量の精、東岡の門、獨り君を推すと云う。寛政十二年閏四月、官、君に北陸道、及び蝦夷地方の東南の沿海を測量し以て地度を定むることを命ず。明年正月、官、君父子に銀各十銖を賜り刀を佩び姓氏を稱うことを許す。其の天明年内に窮民を兩救せしを賞してなり。享和元年三月、又、伊豆、相模、二總、常陸、陸奥の沿海を測量することを命ず。六月、又、出羽、三越、佐渡、能登、駿河、遠江、糸河、尾張の沿海を測量することを命ず。文化紀元に至

有所不合。就曆家質之。猶未釋然。既而官命有改曆之舉。召高橋東岡考新自浪速來。君執贊往見。始聞西洋曆法。理精數密。宿疑乃解。遂著舊學之推步測量之精。東岡之門。獨推君云。寛政十二年閏四月、官命君測北陸道及蝦夷地方。東南沿海。以定地度。明年正月、官賜君父子銀各十銖。許佩刀。稱姓氏。賞其於天明年內。兩救窮民也。享和元年三月、又、命測量伊豆相模二總。常陸。陸奥沿海。六月、又、命測量出羽三越。佐渡。能登。駿河。遠江。糸河。尾張。沿海。至文化紀元。集地方各圖。成一大圖。進呈其九月、官賞賜慶未推爲小普請組。屬天文方。既而又、命測量山陽。山陰。西海。南海。四道。並對馬。府內。十四年四月。府內圖成。進呈自蝦夷測量之初。至此。閱十有八年。五十七道。無地不涉。遐陳僻壤。盡測量而圖之。最後有、命集成萬內沿海。內地全圖。

及度。終詳行。詳記至文政元年。齡七十有四。罹病。其四月十三日。別於不起。至四年七月。輿地全圖。年成。進呈。以其九月。四日。歿。官追賞其功。賜慶米。宅地。於福忠。將以旌之。君爲人。真率。不修邊幅。精力。絕人。每測量。命下。極喜。見顏。色。不日。而發。乃躬歷險阻。凌海濤。奔走數十里。風雨寒暑。未嘗少沮。喪何其氣之盛。而事之勤也哉。所著有國郡晝夜時刻考。對驗表。紀源術。并用法。刻圖。入線表。紀源法。地球測達術。問答。凡若干卷。皆藏於家。君先配長由之女。繼配桑原氏。皆先歿。得三男二女。昆季並錫仲子。景敬嗣。亦先歿。孫忠誨。嗣君之。孫在城北淺草源空寺。東岡君之。瑩域從遺囑也。忠誨以狀來請。余銘乃畧叙之。爲銘曰。源泉以遠。流長以疏。善積之厚。慶則有餘。叩天之閭。祐坤之輿。瘠毒。嘉不能爲。瘠瘠寒暑。雨不能爲。痛乃如之人。能有幾。與貞猷可。勛勛則不。至政五年壬午。嘉平月下。游淡海關。研書。著福忠誨立。廣府御前。

り地方各圖を集めて一大圖と成し進呈す。其の九月、官、廩米を賞賜し擢んで小普請組と爲し天文方に属せしむ。既にして又、山陽、山陰、西海、南海の四道と壹岐、對馬の二島の官道、及び沿海を測量することを命ず。十二年、又、伊豆七島、及び箱根湖を測量することを命ず。既に事を竣え江都府内を測量す。十四年四月、府内圖成り進呈す。蝦夷測量の初めより此に至る十有八年を閱し、五畿七道、地として渉らざるなく、遐陬僻壤、盡く測量してこれを圖す。最後に命有りて寓内沿海輿地全圖、及び度数譜、行程記を集成す。文政元年に至り、齡七十有四、病に罹り其の四月十三日、劇しくして殆ど起たず。四年七月に至り輿地全圖等成り進呈し、其の九月四日を以て歿す。官、其の功を追賞し廩米宅地を孫忠誨に賜り以てこれを旌せり。君、ひととなり真率にして邊幅を修せず、精力絶人、測量の命下る毎に輒ち喜び顔色に見し、不日にして發す。乃ち躬ら陰阻を歴え海濤を凌ぎ奔走すること数十百里、風雨寒暑、未だ嘗て少しも沮喪せず。何ぞ其の氣の過にして事の勤なるや。著す所、國郡晝夜時刻考、對数表紀源術、並びに用法、割圓八線表紀源法、地球測遠術問答凡そ若干卷有り、皆、家に藏す。君、先配長由の女、繼配桑原氏、皆、先に歿す。三男二女を得、昆季並びに歿す。仲子景敬嗣ぐも亦先に歿す。孫忠誨嗣ぐ。君の葬は城北淺草源空寺の東岡君の塋域に在り。遺囑に従うなり。忠誨、狀を以て來り余に銘を請う。乃ちこれを畧叙し銘と爲す。曰く、源は深く以て遠く、流れは長く以て疏る。善積の厚き、慶は則ち餘有り。天の闇を叩き、坤の輿を極む。瘴烟毒霧、瘡を爲す

能わず、祈寒暑雨、痛を爲す能わず。乃ちかくの如き人、能く有らんか。貞珉泐すべきも跡は則ち渝らず。
文政五年壬午嘉平月下澣淡海閣研書 孝孫忠誨立 廣群鶴鑑

(うえだ こういち・朝日新聞社OB)

「天道幽玄」

葛西昌丕と忠敬との出会い



唐丹村測量之碑

宇宙の摂理を求める



・「揺らぐ地球」 ・奇士悩み記す



河北新報 2005年4月3日

宮城県古川市 武川芳男さん提供

○解説文

一御知行所下総国香取郡佐原村酒造人惣代久左衛門半七奉申上候私共
去天明八申年御改之節奉書上候酒造米高之儀、近年引続商

売不引合^二付年々自然と減石仕桶諸道具等も手入不仕其^二差置

朽損用立不申候故右書上高^一過分^二減造仕候、右^二付去戌年半石造

猶又定例之通勝手次第酒造可致旨被為 仰付十分一御役米被仰渡候

節も右之段奉申上候所、半石造之十分一御役米可差出旨被仰付難有

奉御請候、尤当亥年^一先達^二而書上高程酒造仕度奉存候得共、前書

奉申上候通り桶諸道具多分^二相損修覆急^二は出来不仕候間、当年

之儀は左之通り酒造仕度奉存候、何卒御慈悲を以御開濟被成下置候

様奉願上候

酒造株高米拾九石
同造米高九百石之内

一当亥酒造米高貳百石

酒造株高拾六石五斗
同造米高七百石之内

一当亥酒造米高貳百石

(酒造人十五人、造米高名前省略)

右之通亥老ヶ年限造高^二被仰付被下置候ハ、一同難有仕合^二奉存候、
以上

享和三亥年八月

御地頭所様

御役所

御知行所佐原村
酒造人十七人惣代

久左衛門

半七

酒造人

久左衛門

同

仁兵衛

前書願之通御開濟被成被下置候様一同奉願上候、以上

永沢治郎右衛門代を兼

伊能三郎右衛門

年番名主

仁兵衛

前に本誌第二七号の『家牒』の解説で記した通り、佐原村では、伊能家五代目の景知が、常陸国牛堀村(潮来市牛堀)の平八郎から、酒造株七〇株を金一〇両で買い請けて、延宝六年(一六七八)から酒造をはじめた。その後、農業生産の発展や利根川水運の刺激などによって佐原村の酒造は次第にさかんになり、一〇〇年あまり後の天明八年(一七八八)、幕府が全国の酒造米高・株高を調査したときには、佐原村の酒造人は三五人に増加していた。このころが佐原村の酒造の最盛期であつたらしい。右に掲げた享和三三年の減石願では、酒造人は一七人となつているが、その中で、伊能三郎右衛門と永沢治郎右衛門の二人の酒造米高は、他の者にくらべて、とびぬけて多い。伊能は「酒造株高三拾三石・同造米高千四百八拾石之内、当亥酒造米高六百石」、永沢の方は「酒造株高五拾石・同造米高千六百七拾五石之内、当亥酒造米高六百五拾石」と記されている。天明八年の調査のときには、伊能・永沢両家は、いずれも、酒造石高が千石を越えていて、いわゆる「千石造り」の酒屋になつていたのだが、享和三三年には、それぞれ、「六百石」「六百五拾石」に減石することを願っているのである。これに対して、その他の酒造人では、「貳百五拾石」に減石することを願っている者が最高であつて、伊能・永沢両家の半分にも及ばないのである。なお、永沢家が酒造をはじめたのは、享保九年(一七二四)に、伊能家

から酒造株三〇株を譲り受けてからであるが、いつの間にか伊能家を
 追い越して、佐原村一番の酒造家になっていたのである。

次に、伊能三郎右衛門に対して、地頭所から与えられた酒造切手の
 写しが載っているの、それを見ていただく。

○酒造切手



門訴事件

享和元年（一八〇一）一〇月、佐原村で門訴事件がおこった。門訴自体は未遂におわったが、年貢納入に関して、二〇〇名ほどの村民が集団で「欠出し」、江戸の地頭所へおしかけようとしたもので、佐原村としては珍しい事件であった。このことは、『金鏡類録』第四冊に紙数八枚（四〇〇字詰にして約一四枚）で記されているのであるが、ここで、それを、なるべく簡略に記してみよう。

この事件は、地頭所（津田家）役人の渡辺清蔵らが佐原村へ下向し、年番名主半重郎宅を宿として「年貢米永定免割付」を行い、一〇月五日に、金納ねだんを「八斗四升替」と申し渡したことからはじまった。

七日になると、小前百姓たちが持宝院という寺に集り、夕刻から半重郎宅へ大勢でおしかけ、「当秋は不作なので、年貢の引き方と金納ねだんを町米並にしてくれるように」と願い出た。金納ねだん「八斗四升替」というのは、年貢を金納で行う場合、米八斗四升を金一両に換算するという意味である。これに対して、農民たちが、換算率を「町米並」にして欲しいと要求したのは、その年の米の市場価格からみて、八斗四升では米が安く見つもられていて不利だったからであろう。

これに対して、名主の半重郎や彦作は、止宿中の役人の手前をはばかり、「大勢より集まっては徒党と見なされる。惣代だけで願い出よ」といつて解散させようとした。だが、このことは、かえって、百姓たちの不満をつのらせた。八日、名主たちは、村役人の力だけでは百姓たちをおさえきれぬと思い、名主後見の永沢治郎右衛門と伊能三郎右衛門（景敬）の二人に取り鎮めを依頼した。二人がのり出して説得に当たったとき、百姓たちは「村役人共は、われわれが願書を出したのに、

それを打ち捨てておいた」となじり、なおも、願の筋を強く主張して譲らなかつた。そこで、三郎右衛門らは、一方では百姓たちの惣代を呼びよせて、小作料の引き下げ等を約束してなだめると共に、地頭所役人に対しては「百姓共の不調法」を詫びて、村役人から年貢の引方を願わせた。しかし、地頭所役人が承知した年貢の引方は、少なくて問題にならなかつた。

翌九日の夜、三郎右衛門と治郎右衛門は、百姓たちの惣代を呼び、「この度の願いは急の願いなので地頭所では聞きとどけてくれない。そこで『御憐愍米百俵』を下されるよう取りはからうつもりである。もし下されなかつた場合でも、われわれが身を切つてでもそれだけの米は出すから、どうか、それで皆を取りしずめてもらいたい」と頼んだ。

一〇日、百姓代らは、前日の米百俵という条件に対して米二百俵を願った上、年貢米の納め方に関して米ごしらえを簡略にして欲しいと強く要求して退かないため、三郎右衛門や名主たちは、この件を地頭所役人に願ったところ、役人は立腹してきき入れなかつた。「米ごしらえ」とはどういうことか、その具体的なことは名主・組頭が地頭所に提出した願書の中に記されている。後に、その願書の全文を紹介するので、それで見えていただきたい。

右のような経過があつた後、十日の夜、「小前のもの共」の「欠出し」がおこつたのである。このことを聞くと、地頭所役人の渡辺清蔵は、速刻、江戸へ帰った。三郎右衛門や村役人たちも、追々、「欠け出し」を差しとめる為に出立した。

翌十一日、三郎右衛門らは、舟で佐原村を出立、木下を経て、明るる一二日の夕刻、ようやく、八幡宿出口で「門訴心がけて罷り出た」

恐れながら書付を以てお願い申し上げます。

下総国香取郡佐原村五組惣代名主彦作・同半重郎・同仁左衛門・組頭利兵衛が申し上げます。当村の年貢米の納め方については、これまで一重俵のままで御出役様の御出張先へ持参し、お改めを受けた上で上皮俵ごしらえなどして参りましたが、このようなやり方だと人手の少い百姓も農業の手すきの時に俵ごしらえをしておくこともできず、いよいよ御上納という時になって、ご出張先で、つくるのでこみ合つて、俵ごしらえがはかどりません。そのため、自然と上納がのびのびになって一同安心することができず、ことに、年々御年貢取立の時節は麦作蒔きつけの最中なので人手が少く、一同難儀至極です。勝手がましいお願いで恐れ入りますが、俵ごしらえの事は、あらかじめ俵をこしらえておいて、お差図の日限に御出張先へ持参し、お改めを受けた上で上納したいと、小前一同のたつての願いなので、このたびお願い申し上げる次第です。尤も、右の通り、お聞き済み下さるならば、今後、米の質や舁目のことはもちろん、縄俵まで随分念を入れてつくり、少しもおろそかにはいたしません。上納のときに、もし粗略なことがあればおはね俵（不良のはね出し俵）を仰せつけて下さい。なお又、容量の点は貫目お改め、おためし俵をされた上、万一、舁目不足等がありましたならば、どのようなお叱りをうけても、その時になって一言の弁解も致しません。御慈悲を以て前書の次第をお聞き済み置き下されば、有りがたい仕合せと存じます。以上

名主 彦作

半重郎

享和元年酉十月

同仁左衛門

組頭 利兵衛

御地頭所様御役所

願いのすじを要約すれば、年貢米の納め方について、これまでは、村へ出張して来た役人のところまで、米を一重俵のまま運んで検査をうけた後、その場で上皮俵（上にかぶせる俵）をつくり、米ごしらえを完全にして納めることになっていたが、これからは、めいめいが、あらかじめ、家で上皮俵までつくって納めるようにしたいというのであろう。

いずれにしても、二重俵で納めることになるのであるが、これが、「小前一同たつてのお願い」というように、百姓たちの強い要求であったのは、これまでの納め方だと、「麦作蒔きつけの最中」でいそがないが、「一同難儀至極」だったからであらう。また、願書には書かれていないが、一重俵のままで検査をうけると、米の質量や縄俵まで厳しく調べられるからではないかと推察される。

この一件は、実際に年貢米を納めるときに、まだ、ちょっとしたトラブルもあったが、大体、右の願書を提出したところで結着がついていたようである。というのは、これと同時に、佐原村の「小前百姓惣代」七人と「村役人惣代」四人の名で請書一通と別の願書一通が提出されているからである。請書というのは、俵ごしらえについての願いが承認されたので、その通りに実行することを約束した文書であり、別の願書とは、「江戸御屋敷様へ直訴」しようとした件について、許してくれるよう願った文書である。つまり、この場合、願書は、これから何事かを願うのではなく、結着のついた事柄を、形式的に、願書として記したものである。現在、農村などに残されている願書の控えや下書には、このようなものが少くないのである。

（こじま かずひと・浄国寺院主）

静岡の御注進之覚

加藤 忠三

私は以前行われた伊能ウオークに参加し、それを機会に静岡の伊能忠敬について調べています。その折静岡県立図書館で「伊能忠敬測量日記」（佐久間達夫訳）を見つけました。これによって静岡の足取り、行程を知ることが出来ました。さらにこの日記の宿泊場所の特定から地元に残る忠敬の接点を探しています。しかし永い年月により宿泊場所の消滅、移動、火災などにより地元の資料の収集はうまくいきませんでした。

今年の一月、静岡市内で古文書の勉強会を開いている駿河古文書会副会長の中村典夫さんと話をする機会がありました。私が伊能忠敬の話をする、こんなものがあると見せていただいたのが「御注進之覚」のコピーでした。これは静岡市内の広野地区内にある公民館収蔵の文書で、駿河古文書会が昭和61年に現地で複写したものだそうです。これを平成12年中村さんが読み下し文とともに、解説資料を作り、勉強会に使ったものです。そこで中村さんにお頼みし、「御注進之覚」を伊能忠敬研究会に報告することにしました。

この文書は解説をお願いした研究会の佐久間達夫さんにより第五次測量のものであることが確かめられました。「測量日記」で見ますと静岡市内、江尻から丸子までの東海道の測量の行われたのが旧暦1805年3月9日で、これは今から200年前の新暦の4月8日になります。この区切りの年に研究会にこの文書の報告が出来たのも何かの縁と思います。

中村典夫氏の解説資料から 「平成十二年二月十二日」

これは大変興味深く、当地には珍しい文書である。標題に「御注進」とあるが、全体的には「廻状」というべきものである。

まず「前書」部分（右之通御觸書到来・・・）より前の部分は「先触」そのもの、これを示して「奥事」部分では、「清水丁より」「海邊通り」にある「村々」へ順達すべきことを記す「廻状」の形式となっている。先触の内容は、江戸を二月二五日出立し江尻・丸子の各宿に三月五日、六日に宿泊する予定であるから、ついで各々の宿は頭書のごとく人馬その他を用意しておくように、というものである。文書の最初に「御證文」とあるが、これは江戸時代宿駅常備の人馬継立（つぎたて）の種類をいう呼称の一つである。これは老中の発行する、宿駅人馬の無賃使用を認めるといふ意味の人馬使用証明書とでもいふべきもので、この当時、旅行者が無賃で人馬を使用できるのは、將軍が直々に許可した「御朱印」（伝馬朱印）を携行している者か、またはまた無賃使用を認められた「道中奉行」の命を帯びた役人か、或はこの場合のように「御證文」を持つ者か、この三種に限られていた。

ではいま「御證文」を携帯して宿駅の人馬を使用し、宿泊する予定者は一体誰であるのか。それは実にかの有名な測量家、伊能忠敬先生とその一行であった。即ち当文書は伊能忠敬先生の一行が当地を測量したことを証する文書なのである。

次に、それは何時（いつ）のことであったか。文書にある「丑三月二日」の干支（えと）と目付からすると、「資料」に掲げた「表」のうち、伊能忠敬先生の「第五次測量」といわれる文化二年（一八〇五）のことではなかったのかと思われる。第五次測量の目的地は紀伊半島、瀬戸内海の島嶼、中国沿岸であったという。だがこの折、彼の

江注進之覚

御証文
一人足七人
一馬六疋
一御用御先長持宅棹
右者測量為御用、明廿五日江戸
出立、左之泊り順二罷越候条、
休泊用意、有之。且又先触
二申達候通、道筋案内之儀、宿
間之村々江前後宿より申通条、
我等共通行之節村堀二待請、案
内可有之。村高・領主・家数書
付、差出可被申候。以上
丑三月二日
伊能勘解由
高橋 善助
市野 金助
坂部貞兵衛
三月五日
江尻宿泊り
同 六日
丸子宿泊り
右之通御触書到来候二付、為御
心得一写相廻し候、早々順達、留
り村 相返し可被成儀。以上
江尻宿問屋 印
年寄
清水丁より 海辺通り
先々村々 名主中

御注進之覚

御証文

一人足七人

一馬六疋

一御用御先長持宅棹

右者測量為御用、明廿五日江戸

出立、左之泊り順二罷越候条、

休泊用意、有之。且又先触

二申達候通、道筋案内之儀、宿

間之村々江前後宿より申通条、

我等共通行之節村堀二待請、案

内可有之。村高・領主・家数書

付、差出可被申候。以上

丑三月二日

伊能勘解由

高橋 善助

市野 金助

坂部貞兵衛

三月五日

江尻宿泊り

同 六日

丸子宿泊り

右之通御触書到来候二付、為御

心得一写相廻し候、早々順達、留

り村 相返し可被成儀。以上

江尻宿問屋 印

年寄

清水丁より 海辺通り

先々村々 名主中

地へ向うためとはいえ、当地に「休泊」するのは単に通過するだけではなかったのではないか。というのも江尻宿の間屋・年寄が連署して「海邊通り」「先々村々」宛に、この先触を順達しているからである。

伊能先生一行が海邊を通るということは、他でもない海岸線の測量を実施するためであつたにちがいない。文化二年三月五、六日に、伊能先生一行が実際にどのように行動したか。この点については、忠敬先生自身の筆になる『伊能忠敬測量日記』を繙（ひもと）けば明らかにするはずである。たゞ残念ながら『同日記』は活字翻刻されたものもあるようだが、それすら一種の稀観書（きこうしょ）で、当地にあつては簡単には見られない。それはとにかく伊能忠敬先生は十七年にわたる全国測量の様子を一日も漏らさず、その旅中にみずから書き記した『日記』を残していたのである。この一点だけでも驚嘆すべきことで、たゞたゞ畏敬の念に打たれるばかりである。

扱、一般には東海地方の海岸線を測量したのは、「第四次測量（享和三年二月～同年十月）」（資料）といわれている。問題は、当文書に「丑年」とあり、江戸出立が（二月）二五日ともある二点から、第五次測量の途次のことと誤料したことである。もしこの第五次測量において、右の『日記』に当地を測量した事実がないとすると、この文書は「第四次測量」の折のことと見るのが至当ということになる。たゞ、そうすると干支が合わないという矛盾が起る。享和三年（一八〇三）は亥年だからである。

この矛盾を解決すべく、伊能先生自身の手になる『測量日記』を閲覧せんと欲したが、前述のごとく翻刻されたものといえども稀観書であり、見るができなかった。たゞ諸家の手になる「研究書」があ

り、それら『伊能忠敬』（大谷亮吉編著）、『高橋景保の研究』（上原久著）等によつて確かに第五次測量の折、忠敬先生一行が当地を測量していた事実を承知するに至つた。即ちその最も簡便な方法としては、いま藤田元春著『伊能忠敬の測量日記』なる小冊子を一瞥（べつ）することによつてであつた。これは昭和16年に日本放送出版協会より出された「ラジオ新書」のうちの一冊（NO59）である（これは僅々、113頁の小冊子に過ぎないがよくまとまっている）。

（かとう ちゅうぞう・静岡市葵区）

編集部注

加藤さんからのご要望により佐久間さんに解説をお願いいたしました。先触の解説は一部改めてあります。

解説

佐久間 達夫

伊能測量隊による全国測量は、寛政十二年（一八〇〇）閏四月十九日に蝦夷地測量の第一歩を踏み出してから、文化十三年（一八一六）の江戸府内測量の終了まで、十七年の歳月をかけ、十回に分けて行なわれた。この間三七五四日（天体観測日数一四〇四日以上）の日数を数え、測量した箇所は、日本の北の果て蝦夷地南部から南の島、種子島・屋久島までの海岸線と主な街道、約四万キロメートルである。

「静岡古文書会」の文書は、内容から推察すると、第五次測量時の往路、江尻宿で伊能勘解由（忠敬の晩称）他三名から測量先村々の役人宛に出した「先触」である。

伊能忠敬は、師の高橋至時と共に、正確な曆を作製するには「子午線一度の長さの確定」が必須であることを痛感した。しかし、子午線

一度の距離測定では、幕府の測量許可を得ることが不可能であると考
え、当時の北辺の事情から、北方の地図作製が必要であることを幕府
に申し入れ、紆余曲折を経て、寛政十二年閏四月十四日に「蝦夷地測
量の許可」がおりた（「仏国曆象編斥妄」「蝦夷干役志啓行策略」）。

したがって、第一次測量から第四次測量迄は、わずかの手当（幕府
からの手当。第一次測量二十二両二分（一日銀七匁五分）、第二次測量
四十両（一日銀十匁）、第三次測量六十両、第四次測量八十二両二分）
以外の宿泊料、測器運搬に雇った人馬の料金などは、忠敬が自分支払
いであった。

しかし、第一次から第四次測量地までの「東半部沿海全図」の作製
によって、忠敬は小普請組に登用され、以後の測量に関係した一切の
費用は幕府からの支出となった（高橋景保測量御用日記）。

天文方高橋景保の手付手伝いとなった忠敬は、文化元年十二月二十
五日、堀田摂津守から西国筋一円海辺測量の命令がくだり、忠敬は、
今迄の如く年々帰府して越年するという測量ではなく、一挙に西国筋
の測量を完了させる計画を立てた。

これを受けて幕府も、老中戸田采女正の名で、諸藩江戸詰を大手御
番所後口御勘定に召集し、忠敬一行順国時の対応、心得、道順などを
申し渡し、「御証文」三通、と、「御書上難形」が渡された。

また、天文方では（伊能測量隊）、人馬の調達や川越、宿泊地など
を記した「先触」をだし、測量が容易に行なわれるようにした。

このような文書（御証文・書上難形）は写し。村役人が写させていた
（く）を受け取った村役人（問屋・年寄・名主・組頭など）は、それ
を写し置き、文書を次の測量先の村へと回送し、最後の村が文書を測

量隊に返却した。

一方、村役人は、測量隊の送迎、測器類の運搬、宿泊、食事、測量
順路の案内、測量手伝いなどについて事前に打ち合わせ、受け入れ準
備に遺漏のないようにした。

測量隊の宿泊は、主に庄屋宅や寺院であったので、これらの家には、
当時の記録が、「測量方御用記」などという名称で残されていて、現在
各地で発見されている。

「測量方御用記」の内容には、「測量隊の給仕に子供を使つた」と
か、「藩主が実測地図の制作を依頼した」など、伊能忠敬に関する定説
を変更しなければならないような記述も出てきている。

したがって、静岡古文書会より私宛に送付された文書は、前記した
天文方から出された「先触」である。

第五次測量は、文化二・乙丑年（一八〇五）二月二十五日に、伊能
勘解由以下、天文方下役三名、忠敬の内弟子五名、侍者・僕など、総
勢十四人で江戸を出立し、東海道の高輪大木戸から測量を始め、藤沢
宿、箱根宿、吉原宿へと測進し、三月七日に江尻宿の府中屋茂兵衛宅
に宿泊。三月八日は、紀州侯の御通行につき、江尻宿に逗留し、翌三
月九日に同宿出立。その後の測量経路は、拙著『伊能忠敬の測量日記』
などを参照していただきたい。

○第五次紀伊半島・瀬戸内・中国測量。御証文と御書上難形

◎ 御証文一

伊能勘解由儀、為三測量御用一、東海道より中国筋、四国、九州、
宅岐、対馬、隠岐、淡路迄海辺浦々罷通り、帰路は中山道、甲州街
道往返共、於途中測量可レ致間、其先々にて差支無レ之様致し、尤、

地方通行難^レ成所は、其所より船を出し、案内致し無^二差支^一様可^レ致者也。

文化二丑二月

采女 印

宿々村々年寄共

◎ 御証文二

人足老人、馬五匹。從江戸東海道、中国筋、四国、九州、彦岐、対馬、隠岐、淡路、海辺廻浦。帰路は中山道、甲州街道往返共御用付、天文方高橋作左衛門手附伊能勘解由、作左衛門弟高橋善助、天文方下役市野金助、坂部貞兵衛罷越付、老人式匹勘解由、老匹宛善助、金助、貞兵衛へ相渡之者也。

文化二丑二月

采女 印

右村宿中

◎ 御証文三

覚

一、人足 六人

一、馬 老疋

一、長持 老樟

右者、測量為^二御用測器類^一。從江戸東海道、中国筋、四国、九州、彦岐、対馬、隠岐、淡路海辺廻浦。帰路は中山道、甲州街道往返共、伊能勘解由断次第御用中幾度も可^二持送^一者也。

文化二丑二月

采女 印

右村宿中

*「御証文」は伊能勘解由が携行し、宿泊所では、勘解由の宿泊の間の床の間へ、白木三方に御証文箱へのせて置く。測量がおわり江戸へ帰つたら、ただちに「御証文」は幕府へ返却する。
(「伊能忠敬測量日記」「測量御用記」)

◎ 御書上雛形

何国何郡何村

但、上書表に左之通、朱墨に而認有^レ之候

本紙美濃紙堅帳

一国限か、一郡限か、一組限りか

何れも組合限り一帳に可^レ認事

何之誰領分 何国何郡何村

一、高 何干何百何拾何石何斗何升何合

一、家数 何百何拾軒

内、何百軒 本村

何拾軒 枝郷字何

一、人数 何百何拾何人

内、男何人 女何人

一、海辺長 何拾何町何拾間

但 何村境より何村境迄

一、村長 東西 何拾何町

南北 何拾何町

内、何拾何町 居村

何拾何町 野間

一、御朱印高 何拾石 何杜 神主田とか

何宗 寺院とか

一、寺 何か寺

内、何宗何寺 何宗何院 何宗何庵

一、社 何々

一、名所 何々

一、旧跡 何々

一、古城跡 何山、誰古城

精者不_レ分者、誰古城と申伝候と認む

一、名産 何々

一、居村より海辺迄 何町

但 居村海辺に候はば、居村海辺通りに御座候と認む

一、当村より隣村何村家在迄

方位何、凡何町、其間田畑か、山越か

一、遠山見渡 何山、方位角、凡何里余

一、島幾つ

内、何島周リ何拾何町 家数 何軒 人家なし

何村より海上何里

右之通、相違無_二御座_一候 以上

年号月 何村庄屋 誰印

□泊触(先触)

第四次測量 享和三年二月二十三日

明後二十五日江戸出立、左の泊順に罷越候条休泊用意有_レ之、且又、先触に申達候道筋案内の儀、間之村々へ前後の宿より申通置、我等通行の節、村界に待請致_二案内_一候様取斗可_レ給候。

以上

亥二月二十三日

伊能勘解由

二月二十五日 泊 川崎宿

二十六日 休 神奈川宿

泊 程ヶ谷宿

(略)

右宿々 問屋 年寄 名主中



静岡市内図に下図を重ねる・加藤忠三作

伊能大図とアイヌ語地名研究

井口 利夫

伊能図のアイヌ語地名調査上の価値について、釧路地方の地名を考える会が、大図公開の釧路会場の紹介（「伊能忠敬の足跡を追って」『地図中心382号』）の中で述べている。

伊能間宮図のアイヌ語地名研究における価値については、古くは昭和7年（1932）に、金田一京助が『北奥地名考』の中で「奥羽の地名の原形を復元しようとする上にアイヌ名が日本化して行った過程に就いては、北海道入口の地方は、年代が奥羽より新しいだけに詳細にその跡がたどれる」として、四つのキーとなる古記録、

①二、三百年以前まだ十分日本化せずに、そっくりアイヌ語であった頃の『元禄郷帳』

②やや日本化した時代の絶好の資料として、伊能忠敬の寛政年度の詳細な地図

③かなり日本化した時代の松浦武四郎翁の「山川取調図」

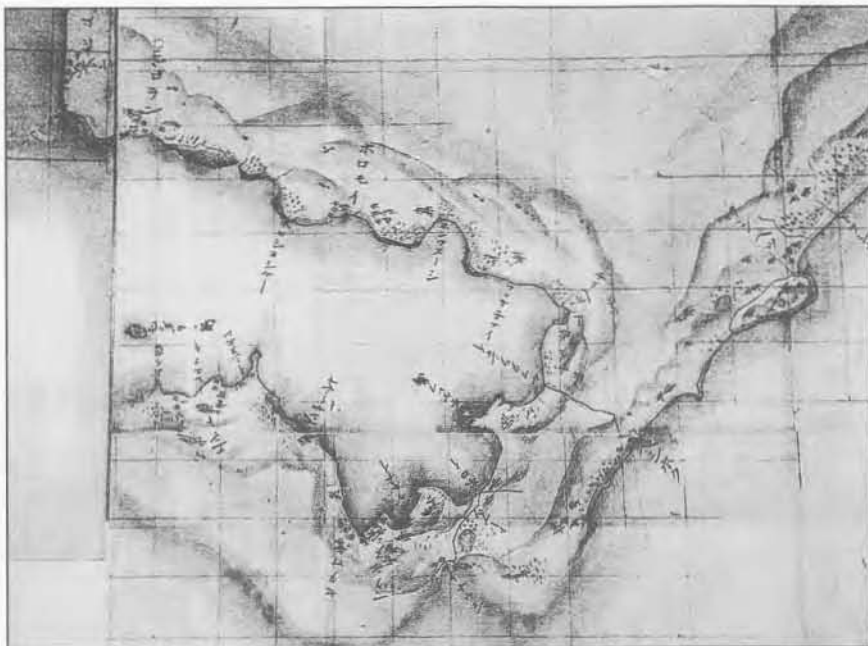
④明治十六年着手して八年、永田方正翁の「北海道蝦夷語地名解」を挙げている。「三百年、アイヌ語の日本化して行った過程を手にとるように詳らかにすることができる。」として、アイヌ語地名の千八百年代初頭の古記録として、伊能間宮図の価値を認めている。この当時金田一京助が大図の写しを見ていたかは判らないが、金田一京助にとっては時代の確定した古い地名が迎えられることで目的は達せられるから、中図でも大図でもそれ程支障はなかったはずである。

伊能大図の発見とその公開についての報道があつて以来、小生がアイヌ語地名の研究にとって大きな価値があることを直感し、期待したのは、これだけのことで無かつた。

アイヌ語地名の研究にとって、その原形が変化して意味が失われた地名の復元も重要なことであるが、それが元々どの地点を指す地名だったのかを特定することも非常に重要なことなのである。旧記・古絵図では、地名の順序はほぼ確定出来るのだが、位置の特定はかなり難しい。ましてや、旧記の場合は記述の順序に混乱があつたりするので、その地名が有つたのは確実として、その位置を推定することはほとんど出来なくなってしまう。その上、かなりの地名が長年の間に大地名化し、元々あつた位置が判らなくなってくる。

正確に位置の推定できる地図は明治に入ってからのもので、正統測量に基づく各種地形図、明治29、30年の陸測假製5万分図・明治20年代初頭の20万道庁切図・同輯製20万図であるが、これらで確定できる地名は大分限られてくる。明治時代和人が大量に入って来た後の地名の中には、その土地に有つたアイヌ語地名がそのまま広域地名として使用されるようになり、元々あつた位置から離れた場所に記入されてしまう場合があるからである。特に字名や村名などに採られた場合などには、古記録にでも残っていない限り、元の地名が何処だったのか判らなくなってしまうものが少なくない。

また周知のとおり、アイヌ語地名はそもそもアイヌの生活に密着した沢・谷・崖・丘・浜・磯・岩といった場所に付けられた地名であつて、基本的には小地域の地名である。従つて、アイヌ語地名の元々あつた場所を特定することは、現地のアイヌ古老が直接その場所を指し示す以外に、かなり困難なことなのである。明治時代の地形図に採られた地名や永田方正の『北海道蝦夷語地名解』は、その古老の直接の



大図の室蘭部分(里帰リフロア展で撮影・縮図)

聞き取りに基いているが、今から30年前位までの山田秀三の時代を最後に、もうアイヌ古老の聞き取りはできなくなってしまった。

従来利用可能だった伊能中図の縮尺は21万6千分の1であるから、書き込み位置が5mmズレていた場合、その誤差は実際上1kmの誤差となる。大地名化した現在の地名の感覚からすれば、これで十分通用する精度である。しかし、小地名ばかりのアイヌ語地名についてはこの誤差は致命的である。これに対し大図の縮尺は3万6千分の1であるから、地名書き込み位置が例えば5mmズレていてもその誤差は約200mであり、凡そ100m単位の精度で地名の位置の推定が出来るはずである。これだけの精度があれば、陸測假製5万分図などの古地形と照合すれば、ほとんどの川口などは問題なく特定出来るはずである。これは今



中図の室蘭部分(武揚堂原寸)

までにない、かけがえもなく強力な助っ人になり得るはずなのである。また当然、地名を書き込むスペースも36倍にふくらむから、収録されている地名も当然増えているはずである。(ただこの点については、事前に入手した展示会のパンフレットを見た範囲では、函館でも中図と大図で一、二の地名の増程度で、ほとんど期待出来ないようであった。)

大図発見とその公開に、並々ならぬ関心を持ったのは、こういう事情による。

札幌展の初日、早速、気になっていた室蘭部分を見た。意外なことに予想外に地名の表記に違いがある。その場で細かい検討は出来ないで、検討は後日ゆつくりするとして、取りあえず各地の写真を出来るだけ撮り置くことにした。

出来てきた写真を見てガツカリした。天井照明の光線の反射が影響して、自動露出が仇で全体に露出不足となり、とても活用できるような代物ではなかった。気を取り直して、一週間後の帯広展まで出掛けることにした。会場を下見すると、自然光線で陽の角度によつては地図の上に陰が出る。午前中の早い内しか撮影チャンスが無いことが判った。当日は開会のセレモニーが終わるのを待つて、早速撮影開始。日当たりを逃げながら、あつちこつちと写して歩いた。後日の寸法合わせのため小さなスケールを置いて写し込んでいった(これは不要なことが後で判った)ので、当方の意気込みに見学の方々が撮影の場所を避けてくれたりして、午前中には順調に撮り終えた。

写真の出来はほぼ満足できるものとなった。

伊能間宮大図のアイヌ語地名研究における価値は、期待に違わぬも

のになりそうである。まだ検討を始めていくらも経っていないが、既に幾つかの懸案の課題に、思わぬ寄与があった。本格的な検討は未着手であるが、これまでの若干の検討結果を報告して、その価値を享受させて頂いた感謝の気持をお伝えしたい。

室蘭の地名に関しては、後述するとして、気になっていたもう一箇所の歌葉(うたすつ。道南渡島半島の付け根の日本海側、寿都町)にある小地名の調査について先に述べる。

このアイヌ語地名は、松浦武四郎『蝦夷日誌 第二編』の歌葉附近約6kmの海岸線中に沿う20以上の地名の中にあり、他に同じ松浦武四郎の『廻浦日記』にあるのみで、他の旧記・古図には未見である。松浦武四郎『蝦夷日誌 第二編』の記述は詳細なのだが、どうやら記述の内容に混乱があつて、地名の順序に狂いがあるらしい。明治時代の地形図では、歌葉地方の地名も大地名化により既に相当位置が動いていて、各種の旧記・古図を引き較べて地形図に落としてみても、ほとんどが相対的な関係しかつかめない状態だった。そのため、前後の地名の位置を確定し、順序の誤りを推定し、求める地名の尤もらしい位置を推定するという手順では作業は行き詰まっていた。

展示会で撮った写真の大図にもこの小地名は勿論無かったが、他の約10のアイヌ語地名を2万5千分図の上で確定できた。その内キーとなる地名の位置がほぼ確定したことにより、他の地名の推定位置のズレが修正できるようになった。それまで何ヶ月も各種の旧記・古地図をひっくり返し、各種地形図の縮尺を揃えて引き較べ、呻吟していた課題が一気に進展した。これは大変な成果であった。

地元室蘭についての検討もまだ緒にいたばかりであるが、その一部を紹介したい。

伊能間宮中図と大図における室蘭の地名を比較すると、付表のような結果になる。中図の地名は『アイヌ語地名資料集成』の「大日本沿海奥地図蝦夷地名表」により、大図は今回展示された「アメリカ伊能大図里帰りフロアー展」の地図を撮影したものによった。

『アイヌ語地名資料集成』では地名の記載位置が海上か陸上かを区別しているが、同じ東京博物館の中図である武揚堂『伊能図』で確認すると、記載位置に違いがあり、これは表中に△で示した。ただ、大図と比較してみるとこの区別はそれほど重要ではなく、単に地名を記入するスペースだけの選択である場合もあることが判る。

記載されている地名を比較すると、中図の地名21に対し大図は24で単純には3増であるが、意外なことに中図に有って大図に無い地名が1つあって(チフタ)、大図で実際に増えたのは4地名となる。また細かい表示の相違も含めると8つの地名に相違がある。結果として、中図の地名21のうち大図と全く同じ表示の地名は僅か12しかないという、予想外の結果になった。

両図における地名の相違がかなりあることから、従来言われていた地図の作成の手順「大図→中図→小図」、つまり中図は大図の縮小図として作られたのではなく、中図は中図で別に作成されたのではないかと考えざるを得ない。また、地名の記入時にはそれぞれ一部異なる資料が参照されているのではないかと疑問すらある。

相違のあったいくつかについて、少し詳細に触れてみたい。

大図で無くなっている中図9番目の地名「チフタ」は、他の旧記・古図にも無い地名である。この附近一帯は一面の湿地で、旧記・古図の類には「谷地」「大谷地」等以外に記載されたことのない、近世を通じて固有の地名の無かった地域である。

また10番目の「チフタラ」は、チプタウシナイ(chip-ta-us-nay)「船・掘る・いつもする・川」→(日本語訛)チフタラシナイ(誤記)チフタラシナイ↓(下略)チフタラ、と変化したものと推定される。

ただ「チフタ」「チフタラ」については、東博蔵図のみならず成田山仏教図書館蔵図も同じで、東博蔵図のみの誤りではない。また、『奥地実測録』にも「チフタラシナイ」とある。

この「チフタラ」「チフタラシナイ」に特に注目したのは、この原名「チプタウシナイ」が室蘭地方では既に失われたアイヌ語地名であったからである。この地名は従来、山田秀三等によって調べられたが不明とされ、推定候補地として別の川が挙げられており、地元でもそれを正としていた。伊能間宮図では海岸線から入った川筋はほとんど記録されていないが、幸いなことに「チプタウシナイ」は絵鞆半島基部の横切り測量のルートに使われたため、内陸部まで川筋の記録が残されていた。山田秀三の推定した候補地から700m程北へ寄った、今は痕跡しか残らない小沢だったことになる。山田秀三の調査からでも40年、記録されてからは実に百人、九十年振りに、失われた地名が蘇った。大図でなければ得られない、大きな成果であった。

大図にのみ見える地名のうち「ベンサイシマ」「イシヨホン」は何れも他の旧記・古図に現れない地名である。

「ベンサイシマ」は「ポロオハシナイ」「ボンオハシナイ」というアイヌ語地名の残されている辺りである。伊達市沿岸に「ベンザイシユマ」というアイヌ語地名があり、「ベンチャイ・シュマ」弁財船の・岩」の意で、船の形をした大きな岩であるという。室蘭のこの海岸は大正時代には埋め立てられてしまったのだが、ここにもそんな岩があったのだろうか。今後の研究課題である。

また「イシヨホン」は「シクトツ」というアイヌ語地名の残る辺り

伊能間宮中図—大図の地名比較(室蘭)

中 図		大 図		備 考
『アイヌ語地名資料集成』 大日本沿海輿地図蝦夷地名表		アメリカ伊能大図里帰り フロアー展		
▲「大日本沿海輿地図蝦夷地名 表」で陸上としている地名 △上表で海上としているが武揚 堂中図では陸上記入と読める 地名		▲陸上に記入されている地名		×中図にあつて大図に無い地 名 □中図と表記の異なる地名 ■大図にあつて中図に無い地名
チマイベツ ホロシレト		▲チマイベツ ホロシレト モロラン ホロシヨシケー		△海→陸
▲○モロラン ホロシヨシケー ホロモイ ホンワヌーシ		▲ホロモイ ホンワヌーシ フトテ子ナイ ▲チリヘツ		△海→陸 △陸→海
▲フトテ子ナイ ▲チリヘツ ▲チフタ チフタラ チケレブシマ		チフタラシナイ チケレフ島 ホコイ バラキナイ		 × □ チフタラ→チフタラシナイ □ シマ→島、プ→フ △陸→海
▲ホコイ ハラキナイ		▲マクンヌシ ▲セタワキ ベンサイシマ イシヨホン		□ ハ→バ ■ ■ ■
△セタワキ [成田図は海]		▲エントモ シエブキ ムイ岩 モシリカシマ トーフツ (沼有)		□ ○無し エントモ→エントモ □ ユフ→エブ □ シマ→島 □ フ→ブ △海→陸 ■
△○エトモ [図はエ] △シュフキ ムイ岩 モシリカシマ トーフツ (沼有) ベシホク (チフタラから朱線) ワシヘツ		▲ワシベツ		□ ヘ→ベ △海→陸
計 21		計 24 (1減4増)		

に記載されている。「イシヨ」の付くアイヌ語地名は、永田方正『北海道蝦夷語地名解』には根室國根室郡フーレン湖附近の「イシヨ オマペツ」Isho oma pet 磯アル川、標茶町の「和語イシヨフンナイに訛る」と出てくる程度の少ない地名である。後者は、知里真志保によれば「イソブンナイ(イソボ・ウン・ナイ)」Isopo-un-nay ウサギ・そこに入る・沢」で、これも今後の課題である。

「マクヌシ」は従来目に触れる範囲のほとんどの古文書には「マクニシ」又は「マクヌシ」とあり、現在の幕西町として残っている。山田秀三は『登別・室蘭のアイヌ地名を尋ねて』の中で、この「マクニシ」という地名について、

マクニルウシ Makun-ru-ushi「奥へ行く・道が・ついている(ある)・処(或は者↓川)」。元来は幕西の川名だったかも知れない。

(略) r音はすぐn音に訛る。上記のrがnに訛ればマクヌウシで、土地のアイヌの音だと伝えられるマクヌーシと極めて近い。

と書いている。大図に残る「マクヌシ」は、日本訛の少ない原形に近いアイヌ語地名であることが判る。

今後、伊能間宮大図の中の未見のアイヌ語地名を再発見することばかりではなく、従来位置が不確定だった地名の位置を特定出来ることによって、北海道内各地のアイヌ語地名研究に新たな展開と成果が期待される。アイヌ語地名研究にとって、伊能間宮大図の再発見が大変な遺産の発見だったということは、今後益々明らかになってゆくことだろう。

(いぐちとしお・新入会員、アイヌ語地名研究会会員)

【参考文献】

- 『アメリカにあった伊能大図とフランスの伊能中図』2004
アメリカ伊能大図展実行委員会編
- 『伊能図』2002
武揚堂
- 『伊能忠敬を歩く』平成11年 廣済堂出版
- 『地図中心382』(2004 Jul) 「伊能忠敬の足跡を追って」
- 『地図中心 伊能大図記念号』(2004 Oct)
- 『奥地実測録』 国立公文書館内閣文庫蔵(高木崇世芝氏私信)
- 『アイヌ語地名資料集成』昭和63年 草風館
- 『北海道蝦夷語地名解』永田方正 明治24年初版
(昭和59年復刻 草風館)
- 『古代蝦夷とアイヌ』金田一京助の世界2 2004 平凡社
- 『北奥地名考』金田一京助 昭和7年
- 『アイヌ語入門』知里真志保 1956年初版
(1985年復刻 1997年五刷 北海道出版企画センター)
- 『北方文化研究報告 第十五輯』昭和35年
- 『室蘭市旧地名考』知里真志保・山田秀三
(復刻『室蘭市のアイヌ語地名』昭和54年噴火湾社)
- 『北海道の地名』山田秀三 昭和59年 北海道新聞社
(平成12年復刻 草風館)
- 『登別・室蘭のアイヌ地名を尋ねて』山田秀三 昭和54年 噴火湾社
(復刻『アイヌ語地名の研究3』昭和58年草風館)
- 『アイヌ語地名研究 7』2005 北海道出版企画センター
- 『有珠沿岸のアイヌ語地名』池田 実
- 『山田秀三からの宿題―室蘭のアイヌ語地名3題―』井口利夫

伊能忠敬の丹波測量

氷上郡の農民が拠出した金

横川 淳一郎

文化十一年二月
 丹波史稿
 天文方御通光(行)被遊氷上郡
 由多(宿)九ヶ所御昼休八ヶ所
 村々人歩(馬)万事諸
 造(難)用郡中割参会所相原
 明見(寺)内村方文書
 別派(寺)内村方文書
 影(寺)内村方文書
 千石(寺)内村方文書
 坂(寺)内村方文書
 坂(寺)内村方文書
 坂(寺)内村方文書

伊能忠敬は文化十一年(二八一四)姫路で正月を迎え、一月八日から十三日までの六日間と、一月二十九日から二月三日までの五日間、計十一日間、氷上郡(ひかみぐん)を測量して通った。
 これは九州第二次測量の帰りである。



げられた。それは伊能忠敬が来郡した時、
 した記録であつた。
 長年の疑問が解けたので詳解する。

これは平成十六年六月、丹波史懇話会から発行している『丹波史』
 第二十四号に、投稿した文を手直したものである。

(なお氷上郡は六町が合併して丹波市になり、多紀郡は篠山市になっ
 ている。)

寺内村方文書

文化十一甲戌正月

從御公儀様

天文方御通光(行)被遊氷上郡

御留(泊)り宿九ヶ所御昼休八ヶ所

村々人歩(馬)万事諸

造(難)用郡中割参会所相原

その時、測量方に掛つた費用は郡全体で幾らか、又どこからその金を工面したか知りたいと思つていたが、これ迄解く手掛りは全然なかった。

平成十五年十二月、私が学んでいる古文書講座で、講師の芦田輝夫先生が寺内村方文書を取り上

明見(顯)寺ニ而会元有之候

則銀高八拾貳貫六百六十五匁七厘

郡中高八六万貳千百七拾五石五斗三升貳合八夕(夕)割

千石ニ付

銀二百三匁七步(分)ニ当ル

此札二百九匁八步(分)

札九十八匁貳步(分)三厘寺内村高ニ掛ル

二回とも測量方の本隊がやって来たが、その人数は和田から栢原・遠坂へは十三人、竹田から国料・栢原へは十人であった。

天文方が昼休んだ所は八ヶ所、泊った所は九ヶ所で、『測量日記』を見ると次の表になる。

月日	昼休	宿泊
正月八日	和田本陣(山南町) 鯛屋金蔵	上に同じ
九日	鴨野村(栢原町) 弥太郎	栢原本陣(栢原町) 土田太郎右衛門
十日	栈敷村(氷上町) 吉右衛門	方町本陣(氷上町) 芦田五郎右衛門
十一日	佐治本陣(青垣町) 中島勘兵衛	上に同じ
十二日	遠坂本陣(青垣町) 足立新右衛門	上に同じ

十三日遠坂本陣を出発し朝来郡へ。

その後、但馬の豊岡・城崎から出石に入り、福知山から氷上郡にやってくる。

月日	昼休	宿泊
正月二十九日	一 大多利村(春日町) 三治郎	大森本陣(市島町) 吉蔵
晦日	大多利村(春日町) 三治郎	国料本陣(春日町) 半太夫
二月初二日	国料本陣(春日町) 半太夫	小多利本陣(春日町) 由良新左衛門
二日	黒井村(春日町) 岸四郎右衛門	栢原本陣(栢原町) 土田太郎右衛門

二月三日栢原本陣を出発し、多紀郡追入村へ向った。

「栢原」は明治になって「栢原」と変り、読み方は両方とも「かいばら」と読む。「大多利」は現在「多利」となり、「国料」は「国領」と字が変わっている。

通行筋の村々から毎日約一二〇人の人夫や、伝馬・雑用・一行の受け入れ準備、送り出した後の始末など集計して、各村から栢原の明顕寺に参った。

福知山藩の場合、『福知山市誌』芦田完著によると、次のように記してある。

測量方一行の諸費用、藩役人の費用、本陣の修理代は藩から出すが、大庄屋宰領の費用、人足の日当などはこれ迄例がないので、村高で割り当てて出すことと命じている。

氷上郡の場合であるが、柏原藩は二万石で郡内の領地は郡全体の二十三パーセントで約一万四五〇〇石と少なかった。残り七七パーセントは三〇余りの大名・旗本の領地や知行地で、一つの村を複数の領主が分割して、治めた村も沢山あった。

その頃は経済的に余裕のある大名や旗本は少なく、治める者から集めるということは出来ず、費用全額郡中高で割り当て、農民の懐から拠出することになったのであろう。

金の工面について丹波国の例を上げたが、愛媛県の場合を会員の伊藤栄子さんが、会報『伊能忠敬研究』第十六号に、「不足した分は夫々の村に割り当てられ、高割りで村民の負担となった。」と書いておられる。

私の住んでいる所は氷上郡^{あきと}琴田村で、一行は文化十一年一月九日村内を測量して通った。当時の村高は三〇三石であったので、測量費用として銀約六二匁提出したことになる。

私事であるが、我家の仏壇に文化・文政・天保の位牌があり、代々百姓であったと聞いている。私の家も伊能測量に協力した一農家であったことになる。

寺内村方文書が見つかったことで、ささやかな繋がりではあるが、私と伊能測量とのかかわりが分かり嬉しく思った。

参考文献

- | | |
|---------|-------------------|
| 足立 澄子所蔵 | 『寺内村方文書』 |
| 古川 茂正 | 『丹波志』 |
| 芦田 完 | 『福知山市誌』 |
| 佐久間達夫 | 『伊能忠敬測量日記』 |
| 渡辺 一郎編著 | 『伊能忠敬測量隊』 |
| 児玉 幸多 | 『日本史総覧 近世』 |
| 伊藤 栄子 | 『愛媛県温泉郡中島町の町資料より』 |

『伊能忠敬研究』第十六号

(よこがわじゅんいちろう・郷土史家)



公儀天文方筑前御領内測量ノ節萬覺書

河島悦子

『測量日記より』

「文化九年一月二十五日、九州小倉着、二十七日晴曇（黒田領より願いに付き、見合違い出立）五ツ頃（午前八時）小倉城下出立」

筑前黒田領よりいかなる願いだったのかは受入れ側文献を見たことがないので断定はできないにしても、出立が二時間遅れたのは明瞭である。

日記には理由どころか、宿所到着七ツ（午後四時）詰め代官戸田平内挨拶に出る、それだけである。次の日も又次の日も宿代官のみが出る。忠敬先生は土分、大庄屋、庄屋は記入されるが、組頭クラスは決して日記に記載されない、だから案内は誰がしたのか、才判はどうなされたのかさっぱり判らない。よもや自分達だけで未知の道を測り、中食をとり町茶屋に泊まったのではないはずだが……

九州一次の島津藩などは担当役、野元嘉三次は再三江戸に派遣され、忠敬師と意志の疎通を計った上、領地入り後は毎日最後まで付き添った。

この度も種子島、屋久島を測るのが最大の目的だからと軽い扱いを自ら望まれたものか、このときの筑前測量は十五里たらずで、筑後領に向かつて行つた。

それにしても、豊前国境に名だたる人の出迎えもなく、藩主名代も来ずとはいまだに理解に苦しむばかり、ここの事情をご存じの方のご

教示を待っています、

でも、筑前領が其の後すべてこうではなかったことを証明するために拙文を投稿させていただく。

測量隊が明日は筑後入りという夜、山家宿（筑紫野市山家）において宿代官原左太夫が渋川主水（会報三七号四〇ページ参照）の門人だったのが縁で、この年七月筑前領測量中及び、九州を後にする十一年十月、豊前海岸まで付添った。他にも筑前分間方山本源助、上野小八両人が事前調査を重ね、青柳勝次が名所案内につくのだが、何故か二月の筑前入りには名前がでてこない。七月遠賀郡芦屋において、初めてスタッフが揃う。

次に掲げる文は、藩から付廻村役人達への手引書であり、読み下し文にした糸島郡、前原地方の受入れ側文献である。

文化九年申歳八月

伊能勘解由様

坂部貞兵衛様

公儀天文方御領内測量之節

付廻出勤被仰付候二付、萬覺書

高田村庄屋

是松岩七

（文献所有者不明）

お尋ねの節、御答振り心得方

一、御道筋の儀は上野小八様、山本源助様御兩人へ前もって問合せ候事

一、御切手の事は家中拝借ニ相渡候現銀拂り、御引替くださる商人、

便利のため、取扱候事（表向きはそうなっているが、藩札の現銀引替は保証銀が少なく切手価格は下がる一方であった）

一、後口浜砲術の儀、御尋ねなれば家中就而古に加へ候段、御答申すべき事

注、寛永十八年（一六四一）より、長崎警固役を佐賀藩と隔年で勤める福岡藩には、石火矢（砲術）役という家業があり、うしろ浜が練習場だった。

一、能古島、馬牧は御試しに候へども成立ち申さず事（事実そうだった）

一、烽火番の儀、御尋なられ候ば長崎へ異船渡来候節、相図に火を揚げ候場所と相答申すべき事

一、宇手見川は今川と唱候事

一、浦、村、境目等も申上げ候に及ばず、御尋ねも有らば有躰に答申べき事

一、徳永、今宿塩浜、畝数御尋ねも候ばほぼにて御答申すべき事

一、今津塩浜御尋ねも候ばしかと相答申すべき事

一、田島御開き御尋の節、中奥御開立の場合御座無く候条、存じ申さずと御答申べき事（巡検使同様の答案であるが海辺、河口を測つて歩く測量隊はもと始末が悪いものだった）

一、村々御免合の儀御尋も候ば春免と申し候て村々石別、相極り居申し候、天災も之無く候へば右春免にて石別をもつて上納仕り候天災損毛仕り春年貢不足と百姓見及び候年は願出、役人見分合掛りの上、いよいよ春免の御年貢不足に及び候えば春免を御下げ相応の免にて御年貢上納仕り候、この免秋と申し候

一、村古賀名ノ儀、書上帳の通り御答申べき事

大庄屋、庄屋、組頭、心得方御達書の内抜書

一、浦方之諸品相渡候度々、請取書取置き売上指上候事

一、上野、山本御兩人へ人足式人宛、前夜より引付け候事

一、大庄屋、老觸（一領域）老人宛付廻り御二鼻に相成り候えば、名

代庄屋老人付廻りの事

一、村々抱切庄屋案内右同断、名代組頭老人出方の事、付廻庄屋郡切に式人宛右に準じる

一、夫、三十七人（御付廻夫、島々休泊の節は船場まで御道具持送り御帰船迄指出す。二鼻『二手』の節は外に三十七人指出す）

一、夜中御測量場所、御兩人へ問合せ、夫六人出す事

一、御小休所に床六面、日押え式蔀（まこも）用意、箇所、道筋、其の外心得方御兩人へ問合せ

一、自然御入用の撰び蔀、拾枚、傘五本（手当に及ばず）指し送り

一、太郎丸川、泉川御渡船、浦方より出すに付、人夫三拾人宛用意

一、小田川筋は土俵、板橋、其の村抱切調仕り不淨物取除けの事

一、休泊所並びに測量村領、前もつて御兩人へ問合せ

一、梵天竹四寸廻りの分四十本用意の事（早良郡『福岡市西区』より持込候に付き手当に及ばず）

○長さ式尺位かなく須用意（使途不明）

○梵天竹は五寸廻り式間半位随分宜しい

一、大庄屋、庄屋、組頭、心得方御兩人問合せの事

一、村々石高は郷村帳前申上る。新田石高は元禄絵図の通り申上る。

右石高御兩人へ問合せ手控致し相答候事

一、金銀相場（両替か）は前宿閑繕ひ候事

一、村々より御兩人へかねて指上置き候帳面近々御達しに相成候に付、

早々調べ御兩人へ問合せ測量方へ相渡候事

一、島々海辺御二鼻の由、尤も都合により半日替え御測量遊され候

一、御二鼻御一同の節七ツ立ち、六ツ立ち、御泊り所よりの道法、半分わけにて測量

一、郡違いの所（恰土・志摩両郡は明治に糸島一郡）は前郡の大庄屋はじめ、付廻庄屋、数取庄屋等罷出候事

一、数取庄屋ならびに先払組一頭はすべて郡ちがひに相成り候えども、其の日の泊所迄、通し相勤め（付紙、泊り所より御泊り所まで）

一、海辺付廻り役人中とても同船致し候事

一、国・浦分受持ちの場所（郡内で中津領、公領に分れていた）は浦役人にて相付廻り候事尤も人少な島等浦分相談に依り渡海仕る趣に候

一、村々境杭、これより何村抱と書立て候郡境ばかり郡名村付け双方建方

一、御道筋御兩人様へ前もって問合せの事

一、御宿三軒、御下宿四軒手当、御宿割として原左太夫様御手付、前もって浦、岡に掛り御入込み右の外御国御役人宿共に仮雪隠調仕る

一、御本陣、近辺に御荷物置所老軒

一、宿主、袴は原様より御渡し下され候事

○宿主、夏羽織、袴、脇指帯び、村口まで罷出候事

○袴、郡方より御渡しに相成候事、其余は自分用意

注、測量隊は人里離れた海岸、離島などくまなく歩き、農家、漁家に宿泊した。大庄屋、庄屋は羽織、袴は当然もっているとして、着用すら許されない一般農漁民は、藩からの借着……。

一、御頭に応じ（宿泊人数か）宿引出す事

一、右に付き、宿詰、指し出す事

一、宿札は脇々聞合せ通り

○外聞き、御公儀御宿は左太夫様御手付、より御渡成られ候、御国役人御宿は村方にて調仕まつり、札打候事

一、原様御手付、御本陣へ御詰方

一、御役々様通ひ人は出すに及ばず、御国役人ばかり出す事（何を出すのだろうか）

一、御出立朝七ツ時（午前四時）御着八ツ時（午後二時）

一、毎夕毎夕大庄屋はじめ付廻庄屋、村役人、御宿へ御機嫌伺いに罷出候事

但、御三軒共に罷出候大庄屋は時宜に応じ、付廻庄屋、数取庄屋は毎々罷出候事

注、大名扱いで、初期と雲泥の差がある。

一、御境目、大庄屋はじめ付廻役人交代仕り引取候事

注、恰土郡西半分は中津奥平領飛び地と接していた。

一、浦分境に罷出候節、付添庄屋より何村、何浦と申上ルに及ばず

一、今出、水崎、御開自然御尋ね御座候節は書上前御答申上ル

一、姪浜、今宿、徳永（福岡市西区）塩浜の儀御尋ねの節はほほ何程と申上ル

一、田島御開、夫仕（公役の人夫使い）の儀御尋御座候節は中奥御開立に相成らず、己前の儀はしかと存じ申さずと御答申上ル

一、田島御免返上、ならびに田島上納反別御尋ねの節、公儀御役人様御通行の節、御含み通り申上げ候事

注釈

文化八年（一八一二）対馬において、朝鮮聘礼使応接のために幕府要人が五年間唐津領呼子より渡海のため絶えず当地を往来した。遠山景晋、井上利泰、柳生久通、松山直義、林大学乗衡等々公儀役人に対し、村役人達は「含ませられた答」を用意していた。

外に、恰士、志摩郡内宿泊所及び休所、今宿問屋（人馬継所）庄助より駄賃錢一覧表、各村生産高、軒数、各村抱往還長サ等々、測量日記でもときに見かけるものが記された、地元では書上帳と名付けたものが存在する。

田畠開き、いわば新田開発は元禄郷帳（一七〇〇）で答えよと指令しているが、宝暦開き（一七六〇）のことは手控へさせている。

また、測量隊一行にとつては不必要な答弁資料も、前年の対馬朝鮮信使係役人に用いたものが基になっているようである。

地方行政役人が、本省役人に必要以上に気を使っている様子は、今も昔も少しも変わっていない。

測量が終了した文化十一年（一八一四）から約二十年後の天保二年（一八三二）幕府が命令した天保国絵図、郷帳作成時、地方役人達の脳裏には、かつて全国津々浦々を歩いて調査した幕府天文方の姿が甦ったに違いない。

（かわしま えつこ・福岡県筑紫野市）

後記 生れて初めて自分で一ヶ月かけ解読しました。意識に近いものです。原文書は所在不明です。いつも他人に読んでもらった私が、曲りなりにも読めるようになりつつあるのは、伊能陽子さんのおかげです。ペイレ図が佐原にきたとき、彼女は忠敬文書を読むために古文書を教わり、七年たったら読めたと言った。「ちゃあ私は倍の十四年かけたら読めるかもネ、生きてたらいいわね」。そして十年、今のところ元気で読めるようになりました。



高田村庄屋
是松岩七

伊能忠敬白紙
坂部貞兵衛様
公義天文方御領内測量之部
付廻出部役所
高田村庄屋
萬寛書

文化九年歳八月

伊能妙薫宛 渡辺清蔵の書簡 B-181

伊藤 栄子

〔解説文〕

かへすゞ時侯御いとへ(い)な

され候よふぞんじまいらせ候

くれぐ何方へもよろしく御伝可被下候

☆次第に御ひへゞしく

目出度かしく

相成候へども、御そろいいよく

御さい(え)ゞしく御くらし

のよし、御目出たくそんじ

まいらせ候 左候得ばいつぞや

くだりのせつはあいかわら

ず御ちそふ二相成、毎々御厚

志之ほど、かたじけなくぞんじ

まいらせ候 其節も御あんじ

なされ候御内々の一条

松印へ委細相願候ところ

しごく御請よろしく

則、御主人より御認の書面

其儘松印様へ上ゲ置候 いよく

御さへきよ(裁許)と相なり候ハゞ

*い、とえ、の使いたかの
混同は地方のナマリ
*さえさえしく(爽かに)

御遣しなされ候御内書の

おもむきを以、御取計被下候

つもり、よく御のミこみ

なされ候まゝ、先は御あんど

なされ(る)べく候 勿論度々

松印様御逢被下候て、御酒など

くだされ候其席にて

内々御頼の御咄し計りも

なりかね、よも山の御咄し

のうち芝居御見物ニ参り度

よし、御うわさ御座候まゝ

御案内もふし度よし申上候処

達て御断御座候間、夫なりニも

成かね候まゝ、さじき

式けんわたくしかたより

あげもふし、殊の外御よろ

こびニて、このすへ何様之

御事相願候とも都合よろしく

御座候 それに付、御断申

おき候は、川船御年貫上納金

茂右衛門かたより請取候ところ

又々今日の便りニ相届候

左候へハ二重に相成候とも

これは私かたにて御あつかり

申置、松印さまのかたへ

の入用等いたしたく、於いさへ(委細)ハ

御遣しなされ候御内書の
おもむきを以、御取計被下候
つもり、よく御のミこみ
なされ候まゝ、先は御あんど
なされ(る)べく候 勿論度々
松印様御逢被下候て、御酒など
くだされ候其席にて
内々御頼の御咄し計りも
なりかね、よも山の御咄し
のうち芝居御見物ニ参り度
よし、御うわさ御座候まゝ
御案内もふし度よし申上候処
達て御断御座候間、夫なりニも
成かね候まゝ、さじき
式けんわたくしかたより
あげもふし、殊の外御よろ
こびニて、このすへ何様之
御事相願候とも都合よろしく
御座候 それに付、御断申
おき候は、川船御年貫上納金
茂右衛門かたより請取候ところ
又々今日の便りニ相届候
左候へハ二重に相成候とも
これは私かたにて御あつかり
申置、松印さまのかたへ
の入用等いたしたく、於いさへ(委細)ハ

とふからず御目もじにて
 くわしく御談じ可申候
 私事も当月廿五日出立にて
 伊豆へ参り、夫より房州上総
 をしまい佐原へまいり候まゝ
 十月廿日頃は御めもじ
 致べくとぞんじまいらせ候 いまだ
 弥御さへきよ（裁許）と相定不申候
 とも留守に相成まゝ、夫ゆへ
 松印さまへ御内書御あづけ
 申上候 いよく御さへきよ（裁許）と
 もふす事ハ松印さまにて
 相知レ候よし二候間、其せつ
 右之御内書、深川へ御蜜談
 なされ候よし、かたぐ
 相願候ところ、よく御のミ
 こみなされ候まゝ此趣
 さつそく御主人へ御内見
 なされ候よふ御はからい
 可被下候 すへながらミなく
 さまへよろしく御伝声
 頼まいらせ候 急便早々乱筆
 御用捨可被下候 例の通り
 御よみわけ、よき二御はんじ
 可被下候 目出度かしく

るれはつゝ分御所
 松印様は是よりおはせ
 くゝいれも席へ
 内書のお御礼も
 じつとよも山に御
 ハしき指の是西へ
 じつとよも山に御
 じつとよも山に御
 じつとよも山に御

九月廿日

わたなべ

妙くんさま

清蔵

極内用御直披(ムシ)

*文章に読み易くするため濁点を入れた。原文には無い。

【口語文】

(くり返し申し上げる様ですが、時節がら御体を御大切に
なされるよう、お願いします。

呉々も、どなた様へも宜しく御伝えください。かしこ。

* (一) の文章は手紙の最後のあと、ここに戻って読む
もので、書ききれない文は、行間に小さく書かれている。
余り意味の有る言葉は入れない。季節の挨拶位。この書
き方は習慣として行われてきた。最初は☆印から読む。

☆次第に、涼しくなってきましたが、皆様御揃いで御過し
との事、何よりと存じます。

さて、いつぞや御伺いの節は、いつもながら、御馳走
になり、毎度の御厚情の程、有難く存じております。

その折りに、御心配なされた内々の一件について、松印
様方へ委しく相談を申し上げました処、すぐに御請けく
ださるとの事で、早速御主人様よりの書面は、そのまま
松印様へ差し上げました。いよいよ御裁許の出た場合は、
差し出された御内書の趣の通り、御取り計らい下さる筈
で、このことは、よく御理解されておられますから、ど

うぞ御安心ください。

言うまでもなく、度々松印様は御逢いくださって、御
酒など御馳走になった其の席で、内々の御頼みの話し計
りもできず、他の御話しの序でに、御芝居見物に参りた
いとの事を伺い、御案内を申し上げたい旨、申し上げま
した処、御断りなさいました。しかし、其のままにもで
きず、芝居の枚敷二間さし上げました処、大変お喜びに
なれました。このあと、どの様な事を御相談なさって
も、好都合と存じます。それに付けても、お断りして置
かねばならない事があります。実は、川船御年貢上納金
を、茂右衛門方より既に受取り済みの所、又々今日、二
重に届きました。そこで、二重ではありますが、あとの
金は私方で御預りし、松印様への入用に致したく、近い
うちに御目にかかり委しく申し上げます。

私も、今月二十五日の出立で伊豆へ行き、夫より上総
を廻り、佐原へ戻ります。十月二十日には御目にかかれ
ると存じます。

未だ御裁許は決まっておりますませんが、留守になります
ので、その為め松印様へ御頼みの書は、御預けしてあり
ます。いよいよ御裁許が出ることになれば、松印様には
先に、お分かりになるでしょうから、其の時は、御内書
の事は、深川(伊能家の江戸宅)へ内々御相談なさるで
しょう。このことは、よくよく御心得と存じますから、
その節は御主人様へ早速御内見くださるよう、御取計ら
いください。末筆ながら、皆様へ宜しく御伝えくださ
い。急便で失礼致します。いつもの通り御判読の程を、

御願ひ申し上げます。

かしく

九月二十日

わたなべ

清蔵

妙薫さま

極内用御直披

旗本津田氏と用人

本状の差出人渡辺清蔵は、伊能家の在所、佐原村の領主津田氏の用人であった。佐原村は安永七年（一七七八年）に天領（幕府領）の一部が旗本津田氏の知行となった。津田日向守信之の時代で、伊能忠敬が三十三才の時のことである。津田氏の禄高は六千石であったが、佐原村の知行はその中の三分の一位で、時として年代により石高の違いが見られる。確かな石高としては、天保五年に一八五〇石、また更に下って、弘化二年の関東取締出役帳には、津田氏の持ち高は二一六四石で、天領は一六六二石となっている。津田氏について武鑑を見ていくと、年により、小姓組番頭、書院番頭組頭の中の役職についていたが、何故か寄合衆に入っていた事もある。非役になれば、六千石の禄高は受けられるが、役職手当は無くなり、財務を預かる用人もその影響を受けるわけで、旗本も永久就職はむずかしかったらしい。

もともと旗本の知行（ちぎょう）所は、徳川幕府の城下町江戸を守るため、江戸の周辺に集中していた。しかも、旗本は江戸在府の義務があったから、大方は江戸の旗本屋敷に住んでいて、幕政の実務に携わっていた。大方といっても、旗本で幕府の職を得ていたのは、その中

の六割位といわれる。あとの非役の者で、三千石以上、または布衣はいの（御目見得おめみえ以上で六位の身分）職にあった者は寄合組に、それ以下の者は小普請組に編入されていた。

領主津田氏の留守を預かるのは用人で、この用人が、知行の全般を取り仕切っていたのは当然であつたろう。その当然の成り行きの中で、彼らを最も悩ませたのは、金策面ではなからうか。伊能家の文書の中にも、金策のために、上納金という名目で、金を要求された記録もある。それも再々で、名主としても、こうして度々上納ではやり切れない、というボヤキの書状が残っている。村の裕福な商家であり、名主役も務めた伊能家との関係を、この手紙からもくみとる事ができる。

旗本の場合は、年貢米を全部手元に置くわけにはいかないので、必要分の米の外は、換金して送金する方法が取られていた。手間と運賃をかけて江戸で売り捌かなくても、地元で換金した方が手取り早い。利根川に添った佐原は、江戸時代有数の米の集散地であり、暖かい房総地方は早場米の産地でもあった。江戸の米商人達は、早くからこの地方に目をつけていて、産米の多くは江戸という一大消費地に運ばれた。伊能家は商人として米穀を扱っていたから、年貢米の換金等を通して、津田氏とは、金融面での結びつきはあつたであらう。

苦しかった武士の生活

江戸も後期になると、大名はじめ、旗本その他下級武士の生活は、時代と共に苦しいものになっていった。その推移を米価で見てもよい。江戸時代の物価を百相場という言葉で、物価の動きを表わした記録がある。銭百文でどの位の物が買えるか、ということ、米以外の記録もあるが、米は武士の俸禄であり、江戸の庶民の主食となっていたから、米を通して見ると分かり易い。

左は百相場から、銭百文で買える米の量の年代別の表である。

江戸の米価

享保十八年	(二七三三)	一升二合	天保五年	(一八三四)	六合九勺
宝暦二年	(二七五三)	三升	同 七年	(一八三六)	四合
明和七年	(二七七〇)	九合	弘化二年	(一八四五)	五合五勺
天明二年	(二七八二)	八合	安政五年	(一八五八)	六合二勺
同 四年	(二七八四)	五合五勺	文久元年	(一八六一)	三合八勺
寛政三年	(二七九一)	一升七合	同		二合
文化二年	(二八〇五)	八合	慶応三年	(一八六七)	一合一勺

時代と共に、百文で買える米の量の変化が分かる。この中には、飢饉、天災、豊作等の年があり、高下も一様ではないが、全体として見ると少しずつ買える米の量は減っている。幕末になると更にひどい状態になっていった。やがて武州一揆にまで波及する。江戸の町中でも、所々で打ち壊しがあり、騒然とした社会になる。この時代の世相は藤岡屋日記にも詳細に見ることが出来る。慶応四年は明治元年、こうした中で時の流れは、徳川の世に終止符を打った。

元禄以降、米一石が一兩の価で、一兩は銀で六十匁、銭で四千文位の相場が維持できた時代は、比較的に安定した時期であった。忠敬先生が後半の生涯をかけた測量も、世の中余り騒がしくならないうちに終り、偶然のことながら幸いであった。この価は安定時の目安となっている。

大体、武士の禄高は米であり、特に功労のあった者への加増はあったが、江戸の初めから支給の高は変わらず、現代のように給与のペーシングがあつたわけでもない。宛てがわれた俸禄の中で、生活をし

てきたが、時代と共に内容が目減りして、苦しい状態になったのは、庶民と同様であつた。加えて武家には、江戸の初期から軍役の義務があり、武士というのは平和時でも、所定の兵員を抱えることを要求されていた。それも古い「慶安軍役表」という規定で、石高により何人を抱えるかと決められていた。勝手に雇い人をリストラはできないのである。しかし、中期以降は苦境のため、少しずつ人減らしもあつたらしい。人減らしもままならず、苦しい家計の維持は大変であつたろう。

また軍役規定の対象にもならない、下級武士は懸命に内職に精を出した。住居の近くで、彼等は今に残る江戸の物作りをしてきた。植木、草花、金魚の養殖、扇作り、傘はり、盆栽等々は職人だけの力ではなかった。

ここで江戸後期の武士の生活を考えると、渡辺清蔵が伊能家に何度か金策を依頼した気持が分かるように思う。

幕府は赤字を抱えていても、たび重なる貨幣の改鑄をして、財政の辻褄を合わせてきたから、少しも困らない。改鑄の度毎に、貨幣は質を落とし、インフレの要因となった。そのしわ寄せは大名以下全ての生活に影響してきた。大名貸しで、家運を傾けた大商人もいたのである。忠敬は武家への金貸しを、かねてより強く戒めていた。

内密の手紙

本文は用人の渡辺清蔵が、わざわざ女文字を使い、妙薫へ宛てた文。前置きは長いけれども、河岸問題の出入りに関する訴訟から、御裁許を受けるための根廻しを工夫している様子がよくわかる。懐工合の良くない清蔵氏、川船上納金が、茂右衛門から二重に届いたのを幸いに、松印様かたへの入用に致したくと、入金を利用する事まで堂々と書かれている。松印様と隠語で語られている人は、どの様な人物であろう

か。公事方の総元じめは勘定奉行、何れにしても可成りの人物に違いない。松印様といっても、先ず松平氏が思い当たるけれど、由緒ある十八松平のほか、幕府は時により、松平姓を乱発してきた。

この書状の記されたのは、文化八年（一八一二）というから、勘定奉行の中に確かに松平の名はある。また、勘定吟味役の中にも松の付く名前が見える。しかし、吟味役は奉行の下役だから、公事訴訟に関しては勘定奉行は執行権もあり、やはり奉行であろう。どの様な家筋の松平氏かは分らないが、松平兵庫頭信行という。勘定奉行の職は旗本から、寺社奉行は大名から就くことが決まっていたので、彼は旗本の出身であり、末席にその名が見える。

ともかく清蔵氏にしても、名前を表に出せない上、妙薫には分っている人物のため、隠語を使つたのであろう。今まで内密にできたことを、現在になって公表するのは少々心苦しい。実はこの兵庫頭、文化十年には勘定奉行の役を下りている。訴訟問題は結局御裁許になったといわれるが、清蔵氏の働きの多少でも役に立ったのであろうか。女文字で手紙を書くことは、別にふざけた振舞いであつたわけではない。常々、父が娘に宛て書くこともあつた。余り字をくずさないで、やさしく婦人向けの文体にし、末尾を「かしく」（かしこ）と結んだ手紙は、忠敬から妙薫へ当てた書状にもある。この時代、女子の手習いは、先ず「かな文字」…変体がな…から始めた。女子の消息は「かな文字」を主として書くことが多い。また中世からの女房奉書のように、ちらし書きに認めた手紙もあり、明治ころまで書かれていた。

渡辺清蔵の字はくずしていて、普通の文体よりも少々読みにくい。読みにくいことを意識して書いたものか。一般的にこうした文を見た人は、面倒なので読もうとしない。そこで見逃されてしまう。冒頭だ

けみても一目で女の手紙に見えるから、これを念頭に置いて記したとすれば、渡辺氏は中々の知恵者だ。しかも、女文字をすらすらと書く素養もあつた。その上に地方の訛りが入っている。もつとも、江戸時代、人に読まれては困る手紙を、この様な手段で書く事はあつたが、実際に伊能家の文書の中に、こうした書状のある事は、ひとつの発見であつた。相手が妙薫なので、手紙を人目にさらす様な事はないが、清蔵氏は末尾の脇付けで、御直披（親展）と断っている。

参考文献

- *文化武鑑（役職編）文化五年～八年 柏書房
- *江戸の米屋 吉川鑑高著 吉川弘文館
- *三田村篤魚 江戸武家事典 稲垣史生編 青蛙房

（いとう えいこ・古文書研究家）



「水戸天狗党西上の道」筑波山拳兵百四十年記念誌

前号でお便りがありました水戸の川上清さんからです。

「この記念誌を自信を持ってお届けできることが嬉しい。西上隊の歩みにご縁の深い土地から大勢参加され、史実を語られ参加者に感銘を与えた。」と後記で報告がありました。立派な記念誌です。

西蝦夷地測量断念の背景

「長持持参と船買い上げの問題点」

堀江 敏夫

一、西蝦夷地測量計画とその断念について

寛政一二年二月二〇日（一八〇一年二月三日）伊能忠敬の願望を察した桑原隆朝（仙台藩医で忠敬三番目の妻ノブの父親）は江戸から本州東海岸を経て西蝦夷地を通り、クナシリ・エトロフ・ウツプルに至る測量の希望を書面しておくことを勧めた。

寛政一三年一月五日（一八〇一年二月七日）忠敬は、行徳（千葉県市川）から内海を通り、銚子から本州東海岸を経由し、下北半島に出て、津軽半島三厩から松前に入り、西蝦夷地を通って国後、択捉、得撫まで測量したい。この三島のうちで月食を迎えるが、これを観測し、経度を測りたいので、この島までは距離があり、二月末（新暦四月中旬）にも出立したいと記した。さらに、三つの条件を付した。

① 昨年の絵図は精力を尽したが、持ち運び人足が少なく大方位盤を箱館に残し、小方位と象限儀で方位と経度を測り、距離は間棒・間縄を用いず歩測によったので、真の地図とはいえないものであった。もう一度命令を仰せ付けられれば、諸道具を運ぶため、人足二人、馬一疋のほか、長持一棹を認めて頂きたい。そうすれば、総ての器具を持参し、精密のうえにも精密を尽し、真の地図を仕立てて提出できる。

② 当八月十五日（新暦九月二二日）は月食であり、クナシリ、エトロフ、ウツプル三島のうちで測りたい。この月食を測るため、諸道具

を七月中にクナシリまで船便で送りたい。

③ 道中で雨天の時、測量は出来ないので、天候が晴れになるまでその地に逗留したい。

④ 西蝦夷地の沿岸は陸地通行出来ない所があり、松前で船を買上げ、丸小屋（簡易小屋）、食糧等を積んで旅行したい。西蝦夷地海浜を通り、クナシリ、エトロフ、ウツプル等の測量が終ったら船は売り払いたい。

（伊能忠敬測量日記第一巻） 平成一〇年 大空社より要約

この文書をまとめた忠敬は、天文方高橋至時に提出し、蝦夷地取締御用掛松平忠明・羽太庄左衛門に提出することにしたが、その前に桑原隆朝に見せたところ、隆朝は書面を持つて然るべき人（幕府の実力者・若年寄堀田摂津守か？）に会い、内々に相談した結果、その反応から「長持と船買い上げ」の件は削除し、口頭で説明した方がよいと至時に意見を伝えた。

止むを得ないと判断した至時は、納得して忠敬に修正を命じた。しかし、忠敬は書面でも出しても確約はとれないのに、口頭ではさらにその実現は難しいと反対し、これでは測量に差支えがあり、不完全な体勢では無益な努力になると主張した。至時は妥協案を出し、書面は出さないでとりあえず蝦夷地御用掛に口頭で話し、内意を聞いてからにしようという、隆朝は全く書面を出さないで下相談するのは相手に失礼であるとして反対した。

そこで至時は忠敬を呼び、二つの希望は口頭で伝え、もし、聞き入れない場合は西蝦夷地の測量は取り止めとし、本州東海岸だけにしようというものであった。

隆朝は幕府の蝦夷地対策をある程度知っていたと思われる、特に幕吏の階級による長持の持ち込み制度があり、船買い上げとなれば別に船

頭、水士（水夫）数名の雇い入れが伴い、西蝦夷地ではともに難しい問題であった。この二点はまだ松前藩支配地であり、馬は殆ど無く、人足もアイヌになり、継ぎ送りは長距離となるため、人足の戻りの（生活地に戻る）こと）賃金も必要とし、天文方門人・浪人である忠敬の地図づくりの役割では、これらは認め難いものであった。この点で忠敬は安易に考えていたようである。

寛政一三年一月一三日（一八〇一年二月二五日）忠敬は二件の希望を削除し、至時に再提出した。その後、伊豆半島等を追加して、三月三日（新暦四月一五日）若年寄立花出雲守から伊豆半島、本州東海岸、津軽三厓、奥州から江戸に戻る第二次測量の許可がおりた。

伊能忠敬研究会名誉代表の渡辺一郎氏はその著書に「蝦夷地はそんな簡単な場所ではなかった。後年、壮年で活力あふれる間宮林蔵の力をもつても五年の歳月を要した。もし、この案が実現していたら、忠敬は蝦夷測量だけで全精力をすり減らし、全国測量はともにおぼつかなかったのではないか。忠敬の運の強いところである」と記していた。

（「伊能忠敬測量隊」渡辺一郎著 平成一五年 小学館）。当時の林蔵は樺太探検が認められ、松前奉行調役下役格（三〇俵三人扶持・同心格）に昇格していた。

二、蝦夷地での御用長持の持ち込みについて

忠敬は西蝦夷地測量に際して、測量道具の一部を入れて運ぶため、長持の持参を申し出ていた。ただ、蝦夷地の宿駅制度は幕府役人を対象にして成立しており、蝦夷地御用掛では官吏の拝領物を規定しており、人馬の不足からその役職（御用掛は現職名使用）により、御朱印と御証文を受けた旗本に限り、長持の持参が認められていた。

蝦夷地在勤の幕吏には、蝦夷地御用掛筆頭の松平信濃守に御用長持

二棹、他の蝦夷地御用掛に御用長持一棹、寄合・西丸小姓組・西丸書院番組頭・御勘定組頭・御勘定・吟味方改役並・支配勘定・支配勘定勤方・八王子千人同心千人頭に御用長持一棹、御徒目付・西丸御徒目付・御徒押御徒目付勤方・表火之番御徒目付勤方・西丸表火之番御徒目付勤方の旗本には二人に御用長持一棹が許可された。（休明光記）。したがって、忠敬の場合は天文方門人で、浪人の身分であったから蝦夷地での長持使用は認められるものではなかった。このきびしい決まりについて隆朝は若年寄堀田撰津守等を通じて知っていたと思われる。忠敬の文書での長持持参を削除させたのではないだろうか。

三、西蝦夷地の通行状況について

蝦夷地への外国船の接近に伴い、幕府は寛政一〇年（一七九八）四月、まだ松前藩の支配地であった蝦夷地に一八〇名にのぼる大調査団を派遣したのをはじめ、その後も度々巡視団を送った。そこで、幕府の蝦夷地直轄前後の西蝦夷地の旅の様子を見てみたい。

直轄前の寛政一〇年の「蝦夷日記」、東蝦夷地だけが直轄地だった文化元年の「遠山・村垣西蝦夷日記」、東西蝦夷地が直轄地になった文化四年「西蝦夷地日記」によって探って見ることにする。

蝦夷地の西側は松前から熊石までは松前領で、人口数千人の松前・江差といった蝦夷地の代表的な町があったが、その外に人口三〇〇人程度の村が点在し、中には五〇人にも満たない村もあった。こうした小さな村は旅宿・人馬の提供が出来ないため、五カ村程度の通し継ぎ立ても行われていた。

華やかな江差を過ぎ、松前地と西蝦夷地の境である熊石を過ぎると風景は一変し、熊も横行し、完全にアイヌの世界に入った。荷を持つ者、船を漕ぐ者、馬を牽く者もアイヌに変わり、和人の船頭や水士を

得ようとすれば、松前地で手配しなければならない。景色はよいが、少しでも天候が悪いと逗留しなければ危険であった。宿も仮小屋や青草小屋もあって、野陣で昼弁当を食べ、野宿もあった。

三橋藤右衛門一行上下二七人は寛政一〇年五月二五日（一七九八年七月八日）松前を出立したが、藤右衛門の荷物は具足一箱（背負）、鍵一筋、長持一棹で、人馬は人足八人・馬五疋（御朱印）・御用長持（御証文四人持ち）であった。（休明光記）

藤右衛門は宗谷まで巡廻し、宗谷アイヌ一六〇人を集めて二斗樽で三〇〇樽の濁酒を振舞い、幕府が権威をもって行う最高の旅となった。松前城下から熊石村までは陸路。江良町村・塩吹村・江差村・乙部村・熊石村で旅宿泊まり、江良町村で天候が悪く二日逗留、塩吹村で悪天候と御用で二日逗留、熊石村では風待ちで三日逗留した。熊石村には松前藩の番所があり、蝦夷地に入る者の旅人鑑札、旅人預切手、寺請状、切手御渡願等による旅人改めを行っていた。

熊石村からフトロ（太櫓）まで海路。クドウ（久遠）昼食、太櫓に上陸し、場所請負人の経営する番屋に止宿。一行は五艘の船に分乗、大型荷物や食物の運搬には別に五艘の船を雇った。海上通行にも先触の人足を乗船させ、荷物の管理、保全等を行っていた。当時使用された船は図合船と呼ばれる比較的大きい漁船で、長さ七間（約一二・七四メートル）・巾七尺（約二・一一メートル）ほどで、帆を張り、櫓を漕ぎ、普段は鯡・鮭漁に使われた。一艘で年間一〇〇両を稼ぐというから、漁業者にとつて、漁船を旅人に提供することは大きな痛手であり、旅人は雇船とせず、この船を買い上げることがあった。熊石村を出帆すると、松前藩の家来衆を乗せた船三〇艘が見送り、海上松前領を離れると今度はアイヌの船が出迎え、乙名・脇乙名・小使の三役が

船中に並び礼儀を述べた。

太櫓からシマコマキ（島牧）までは陸路。セタナイ（瀬棚）の運上屋に止宿。風雨のため二日逗留。

瀬棚からスツツ（寿都）まで海路。昼食はヲタスツツ（歌棄）の河原に上陸し、幕を打ち回し（野陣）、上下ともこの中で弁当を食べ再び乗船する。寿都の古い運上屋に泊まる。

寿都からイソヤ（磯谷）まで陸路。昼弁当野陣、磯谷の運上屋に止宿。磯谷では順風なく一日逗留。人足はアイヌの男女で、男は額に紐をあて腰の下に荷物を置き地面をずるようにし、メノコ（女）は額に紐を当てた紐で荷物を縛って背負い、男女とも手拍子で唄を歌いながら運ぶ。一日の賃、一人に玄米二合五勺と糲少々、これをもって濁酒を作り、寄り集まって飲む。

磯谷からオタルナイ（小樽）まで海路。フルウ（古宇）・トマリ（泊）・シャコタン（積丹）・タカシマ（高島）の各運上屋に止宿、昼食は野陣、ビクニ（美国）では上陸し昼食をとる。美国は松前藩士近藤惣左衛門の知行所で、繁栄の場所にて、地頭から上下一同にご馳走、松前を出て初めて豆腐を食べたが、諸道具を取り寄せて作る、手製のものであった。順風を得られず磯谷一日・古宇三日・シャコタン二日・高島一日逗留。翌日小樽で昼休。

小樽からオシヨルコチ（押琴）まで陸路。昼食後小樽を徒歩で出立、石狩の運上屋、押琴の番屋に止宿。イシカリ場所は繁栄の地で、松前藩役人・支配人・番人もおり、アイヌ人も多く、ソウヤまでの人足を提供する。イシカリで松前藩役人から奥蝦夷地巡見が成り難いと申し出があり、その対応のため一日逗留。

押琴からマシケ（増毛）まで船路、昼食はハママシケ（浜益）にてと増毛の番屋に止宿。

増毛からシヨサンベツ（初山別）まで陸路。ルルモベツ（留萌）・トマイ（苫前）の運上屋・初山別の番屋に止宿、昼弁当は野陣。留萌は天候悪く一日逗留。初山別の宿所は青草にて修理したばかり、夜中にいろいろな虫が天上から落ち、旅宿にならないため、藤右衛門ら上下残らず野宿する。順風なく初山別に一日逗留。

初山別からテシオ（天塩）までは船旅。初山別で順風なくもう一日逗留すべきと松前藩役人が言ったが、昨夜の野宿もあり、船に下積みした食物類を取り出し、船足を軽くし、海上危ない時は引き返す積もりで、逆風の中出帆、昼頃より順風となり、天塩に着船。風が変わらねば危うき航海に、宿で同勢に残らず祝儀を出し、船頭やアイヌ一五〇人余に鳥目三〇〇文ずつ祝儀を遣わす。天塩で天候悪く一日逗留。

天塩からソウヤ（宗谷）まで陸路。バックアイベツ（抜海別）の番屋に止宿。昼弁当は野陣。七月七日（新暦八月十八日）宗谷に到着。御用で一日まで逗留。この間、宗谷地方のアイヌ一六〇人を集め、三五石（二斗樽三〇〇樽）の濁酒を振舞った。船頭・水士、アイヌ人足に危険が伴ったり、悪天候の場合には特別にご祝儀を与えるのが常であった。（『蝦夷日誌』 寛政一〇年 武藤勘蔵著）

藤右衛門一行の西蝦夷地（松前から宗谷まで）の巡視は五月二五日から七月七日の四二日間で、新暦では七月・八月に当たり、蝦夷地としては最もよい季節であった。それでも順風が得られず、逗留も多く、天塩では危険な航海もあった。この四二日のうち旅行日は二二日で、残りの二〇日は風待ちが大半であった。

文化三年（一八〇六）目付遠山金四郎と勘定吟味役村垣左太夫による西蝦夷地巡見は、東蝦夷地は幕府の直轄地であったが、西蝦夷地はまだ松前藩の支配地であった。西蝦夷地には松前藩士は主要地にしか

居らず、まだまだ不安があった。

金四郎は上下五〇人で松前城下を三月一六日（二八〇六年五月四日）に、左太夫は上下三六人で同月二六日（新暦五月一四日）に別々に出立、途中二度旅宿で会って意見交換をしているが（いずれも帰りの時）、この日記は金四郎が書いたもので、路次の違う場合は報告書では下げ札を付けていた。

金四郎一行は松前城下から熊石村まで陸路。江良町村・塩吹村・江差村・乙部村・熊石村の旅宿に止宿し、江差村で御用のため一日逗留したが、あとは天候に恵まれ逗留はなかった。

熊石村からハラウタ（原歌）まで海路。クドウ（久遠）・セタナイ（瀬棚）、原歌の運上屋に止宿。熊石村は松前地と蝦夷地の境で、旅人改めのため、三月から九月（新暦四月中旬～一月上旬）まで松前藩士が在住した。この藩士に山路を尋ねるに、険悪の場所多く二年前から通行するもの無し。船路往來の地で山路の荷物を運ぶ人足もいない。それでも金四郎は御徒目付等数名を別隊として山路を検分させた。熊石村で順風なく三日逗留、瀬棚でも風向き悪く二日逗留した。瀬棚を出帆した後、風が止み舟入瀬がないため、船中に持ち込んだ丸小屋を組み立て菅苦を用いて小屋を作り止宿したが、船は流されて原歌に上陸し、運上屋に泊る。

原歌からスツツ（寿都）まで陸路。シマコマキ（島牧）・寿都の運上屋に止宿。島牧で海上が荒れて三日逗留、寿都は強風で一日逗留。原歌に残してきた雇船を待つ。

寿都からヲタスツツ（歌棄）まで陸路。歌棄の運上屋に止宿。

歌棄よりオタルナイ（小樽内）川端まで海路、イソヤ（磯谷）・イワナイ（岩内）・フルウ（古宇）・シヤコタン（積丹）・下ヨイチ（余市）・タカシマ（高島）の運上屋、小樽内は新規普請の仮小屋に止宿。古宇

で風雨・強風のため二日逗留、積丹で順風を得られず一日逗留。

小樽内川端からイシカリ（石狩）まで陸路。石狩勤番所に止宿、同所に松前藩士上役・下役二人が詰合。

石狩川からマシケ（増毛）まで海路。アツタ（厚田）・ハママシケ（浜益）・増毛の各運上屋に止宿。厚田で順風得られず二日逗留、浜益で雨風のため一日逗留。ヲフユ（雄冬）崎は岩山で、海中にも大岩多く、波風が強く御神威崎（積丹半島）に次ぐ難所だが、無事通過する。

増毛からトママイ（苫前）まで陸路。ルルモツペ（留萌）運上屋に止宿。ヲヲニシカ（鬼鹿）風雨のため番小屋泊、苫前・ルシヤントマリは番小屋に止宿。

五月一日（新暦六月二七日）ソウヤ（宗谷）に到着し、運上屋に止宿。宗谷には松前藩の勤番所あり、藩番頭・目付・勤番・下役六人詰合、旅籠、運上屋、漁小屋、アイヌ家などあり、西蝦夷地の用地である。御用のため二日逗留し、一四日（新暦六三〇日）宗谷出立。石狩から東蝦夷地の勇払を経て、金四郎は六月二〇日（新暦八月四日）に箱館に戻った。

金四郎一行の西蝦夷地（松前から宗谷）の巡廻は三月一六日から五月一日の五五日間で、新暦では五月、六月に当たり、気候的には全く問題のない季節であった。金四郎は海路を主にしながらも、太田山路、余市山道では別隊を出したて、路検分を行っていた。図合船内に丸小屋を持ち込み、船中で組み立て止宿している。荷物を積む船を別に雇い、海上が荒れると、自分達は次の湊まで歩き、そこで荷物船を待つこともあった。

金四郎の旅行日数は比較的長く、三里で止宿することもあった。宗谷まで五五日のうち、旅行日は二八日で、悪天候・風待ちで逗留したのは二五日、交通事情で松前藩士と意見交換のため二日逗留した。

文化四年（一八〇七）田草川傳次郎の「西蝦夷地日誌」は幕府が東西蝦夷地を直轄地とした年で、箱館奉行を松前奉行と改めた。この巡廻は御普請方近藤重蔵上下六人（御用長持一・具足櫃一・背負御用箱一・柳行李四）、御鷹野方山田忠兵衛上下二人（背負御用箱二・琉球包一・柳行李二）、御小人目付田草川傳次郎（背負御用箱二・琉球包一・柳行李三）で、グループとして出立したが、一緒の時もあり、別行動の時もあった。旗本の近藤重蔵だけが、長持持参を認められていた。

文化四年八月一日（一八〇七年九月二日）松前に集合した三人は、翌二日重蔵の提案で江差から船を仕立てる予定だったが、石狩場所請負人伊達屋林右衛門が図合船を新造し、松前に回送されているので、この船を買い上げ松前から船で行くことにした。出発を一日とし、御用船船方として船頭・水士九名を雇った。買物代金の内金として五〇両を支払い、林右衛門から請取書を貰った。しかし、順風に恵まれず、ずるずると出帆が延び、遂に痺れを切らした重蔵らは熊石まで陸路とし、一七日（新暦九月一八日）松前を出立。御用船で荷物を運び、熊石で合流することにした。江良町村・塩吹村・江差村・熊石村の旅宿に止宿、逗留なし。松前―江良町村間は六村で、人足の継ぎ立てなく、伝馬は江差まで通しであった。熊石に到着したが、御用船は未着であった。

熊石からフトロ（太櫓）まで海路。太田山道は険しく最近の往来はないと聞き、別船にて熊石出帆、御用船は追いかけて来るよう村役人に頼んだ。太櫓の運上屋に止宿。

太櫓からセタナイ（瀬棚）まで陸路。瀬棚の運上屋に止宿。

瀬棚からピクニ（美国）まで海路。瀬棚から別船を出しシマコマキ（島牧）まで行く。ここで御用船に合流、忠次郎が乗船、重蔵、傳次郎は陸路。島牧・寿都・シリベツ（尻別）シャコタン（積丹）・ピクニ

(美国)の各運上屋に止宿。昼食時に歌棄から別船の番人一人・アイヌ人足四人を継ぎ立て、尻別から乗船の番人一人・アイヌ六人の継ぎ立てあり、積丹で歌棄の別船を交える。人足代は御朱印・御証文以外に相対賃金を払った。尻別から雷電越えを試みたが、下り風となり、進むことが出来ず尻別に引き返し逗留。翌日順風に恵まれ神威崎を無事通過、近藤らは船頭・水士・番人・アイヌ人足に酒を振舞う。積丹の先で局部的に発生する時化であるイシカリモノにあり、苦労したとし祝儀を遣わしている。尻別へ美国間は時間差で御用船・乗船・別船の三種が航海していた。

積丹からフルビラ(古平)まで陸路。古平の運上屋に止宿。

古平からイシカリ(石狩)まで陸海路。オシヨロ(忍路)・オタルナイ(小樽内)・イシカリ(石狩)の各運上屋で止宿。下ヨイチ(余市)へ忍路間陸路、忍路へ小樽内間は忠兵衛・傳次郎は荷物船に乗船、重蔵は陸路。高島での昼食時に船頭平右衛門・武兵衛が来て、荷物を積み替え、忠兵衛が乗船して出帆、人足減らす。

石狩からオシヨロコツ(押琴)まで陸路。押琴の運上屋に止宿。押琴から別船一艘をハマシケ(浜益)まで出し、継立荷物の積み替えを行う。

押琴からマシケ(増毛)まで海路。増毛の運上屋に止宿。押琴からの別船の荷物を浜益で御用船に積み替え、オフィ崎(雄冬崎)を超えようとしたが、突風が吹いて危険であり、一時は浜益に戻ろうとしたが、間もなく追い風となり、この難所を新造船とはいえ日和待ちせず通過、近藤らは船頭、水士・人足に酒を振舞う。増毛から陸路をとり、船の荷物はそのままにし、テシオ(天塩)に回送した。

増毛からバックアイベツ(抜海別)まで陸路。ルルモベツ(留萌)・トママイ(苫前)・天塩の運上屋、オニシカ(鬼鹿)の番屋、ツクベツ(築

別)の飯屋に止宿。天塩手前で御用船の船頭が出迎え、増毛を出帆した船は高波のため、天塩に入港できず、抜海別に入港、船頭だけが陸路により天塩に来た。

天塩からソウヤ(宗谷)まで陸海路。オフィニシヤの番屋、抜海別の飯屋、宗谷の運上屋に止宿。暴風雨のためオフィニシヤに四日逗留、順風無く抜海別に四日逗留。風待ちのため抜海別に停留している御用船の船頭に命じて必要な品を取り寄せる。九月十九日(新暦一〇月一九日)陸路にて宗谷に到着。御用船一行も宗谷に入る。御用船船方として同行した七人(二名は多船に乗り込み、暇を出す)も一緒に松前に戻ることにになり、次の添触を出す。船方には御朱印・御証文による人馬の継立て手配、荷物運搬の管理監督があった。

添触

覚

御用船船方

平右衛門・金五兵衛・利右衛門・権右衛門・定四郎・伊之助・福松

此七人はマシケより乗船オフィ崎かわし、夫より陸路イシカリ通同様相越候積り

荷物十屯個

右者西蝦夷地見廻り為御用船方に召連候処、御用相済候に付陸路ソウヤよりヌブシヤ通りシヤクマ越致、東蝦夷地ユウフツよりヲシヤマンベ通り松前迄相帰候間、書面之荷物人足次送り泊々渡船等無差支手当可有之候、泊々賄並人足員数帳面為記、於松前可致勘定候、且此添触此方先触幸便に付為手廻差遣候、以上。

九月廿日

田草川 傳次郎 印
山 田 忠兵衛 印

近藤重蔵印

〔西蝦夷地日記〕 文化四年 田草川傳次郎著 求龍堂

近藤重蔵一行の西蝦夷地（松前・宗谷）の巡視は八月一日から九月一日までの三九日間で、新暦では九月・一〇月に当り、九月は秋晴れに恵まれて順調な旅であったが、一〇月はイシカリモノや台風の影響をうけ、強風・風雨のため逗留が集中した。松前で御用と風待ちで五日、オフイニシヤで悪天候のため四日、抜海別で風雨のため三日の逗留があった。

御用船を買い上げたが、出だして順風が得られず、この船を利用出来ず、三人の行動も別々の時が多く、別船を雇い一時は御用船・乗船・別船の三艘が前後して航行した。御用船は船頭・水主九人を雇い、乗船には陸路の人足を当て、別船には相対賃金を払って継ぎ立て人足を雇ったが、海路の場合も同様の人足を必要とした。

継ぎ立てが終ると、陸海路で生活地に戻る費用を必要とした。蝦夷地の難所の地では陸地人足がいなかったため、船を利用し、船人足の継ぎ立ても簡単に確保出来ず、陸路以上に費用がかかった。

四、イシカリモノと強風地

西蝦夷地には太田岬・雷電崎・神威岬・雄冬岬等の断崖絶壁の地が多く、山路は不完全で、荷物を持ってここを通る人足はいなかったため、海上を利用するしかなかった。しかし、その船もイシカリモノと呼ばれる局地的時化、スツツモノと呼ばれるダシ風、浜マシケの強風と呼ばれた強い風による風雨・時化に見舞われ、海上もまた危険の多いところであった。（札幌気象一〇〇年記念論文集）

寿都は風の吹く町で、名物のダシ風（南東風）のため、難船の発生地で、この辺の家々は風避けの塀を回す。イシカリモノは秋に多く、

石狩湾の前線通過に伴い、局地的に強風が沖と陸から双方に吹き荒れ、大時化をもたらし、古くから恐れられていた。イシカリモノの発生範囲は神威岬から雄冬岬を結ぶ線である。現在は一月の石狩湾に小低気圧を発生させ大雪となる「石狩湾低気圧」と呼ぶものがあるが、これとは性格を異にするものである。

三橋藤右衛門一行はシャコタンで順風が得られず二日逗留し、無事通過したが、天塩手前は強風で危ない目にあい、一行の者に祝儀を出し、船頭・水主・アイヌ等の一五〇人銘々に鳥目一五〇文を遣わした。

遠山金四郎一行は第一の難所は神威岬、次いで雄冬岬で、秋には特に浪荒くとし、イシカリモノを思わせ、難破船が多いところで、通路は至って宜しからずと記していた。

八月廿七日（新暦九月二八日） シャコタン

此辺出崎に而風替るヲカムイよりシャコタン辺迄は申西之風に成候処、シマムイ辺に至りイシカリモノと唱る風吹、双方之風たへ坪に成又地方より吹出し、或は沖より吹今日雨後に而未だ天気定まらず度々帆を巻又降ろし漸水主船頭骨折揺送りビクニへ着。

九月三日（新暦一〇月四日） ヲフイ崎

出崎より手前はイシカリモノと唱へ出し風吹、出崎より崎は又別之風吹、所に至而出崎出張候所故、毎度難船等之有数日日和待致し候場所之よし。

〔西蝦夷地日記〕 文化四年 田草川傳次郎

このイシカリモノを無事通過した時には旅行者は船頭・水主・人足を酒を振舞い、祝儀を遣わして感謝の意を表した。季節や時期にもよるが、西蝦夷地の船路には危険があったから、忠敬の西蝦夷地測量は中止して正解であったと思うのである。

（ほりえ としお・苫小牧駒沢大学講師）

伊能忠敬と間宮林蔵

師弟の絆が蝦夷地の地図完成（一）

佐久間 達夫

一、伊能忠敬と間宮林蔵との出会い

十六世紀から十八世紀にかけて西欧では、イギリス、フランス、ロシア、オーストリア等の強力な近代国家が出現した。元禄二年（一六八九）九月、ネルチンスク条約により黒龍江流域を清国領と認めたロシアは、カムチャツカからベーリング海峡を越えアラスカに進出してきた。カザリン二世は、寛政四年（一七九二）にラクスマンを蝦夷地の根室に派遣して通商を申し入れてきた。幕府はこれを拒絶し、以後、長崎に来るよう申し渡した。

これによつて幕府は、蝦夷地の実情を把握することが必要になり、寛政十年（一七九八）三月十四日に近藤重蔵と最上徳内を蝦夷地に派遣した。重蔵は、従者に下野源助（木村謙次）、それに僕に日本名が善助、金平、孝助、康助、弟助、勘助、武助、藤助、勇助、阿部助、只助、太郎助というアイヌ人を連れていった。

重蔵は、当時ロシア人の居住の進んでいたエトロフ島に渡り、島の南端ベルタルベの丘に「大日本恵登呂府」と刻んだ標柱をたて、エトロフが日本領であることを宣言した。

更に幕府は、翌寛政十一年、東蝦夷を幕府の直轄地とし、蝦夷地御取締御用掛に松平忠明を任命した。忠明に随行した村上島之允の従者として、後に伊能忠敬と師弟の関係を結び、世界地図上に「間宮の瀬

戸」と、名が記されている間宮林蔵（倫宗）が渡島した。

寛政十二年閏四月十九日、第一次蝦夷地測量に江戸を出立した伊能測量隊は、奥州街道を陸奥国三厩まで測進し、ここから蝦夷地に渡り、同年六月朔日と九月十日に、一ノ渡（現亀田郡大野町市渡）に居宅のあった村上島之允宅に立ち寄った。

そのときの事情について忠敬は、「第一次蝦夷地測量日記」に、次のように記して置いた。

・寛政十二年六月朔日 朝六ツ後大野村出立。此日、朝より七ツ後迄晴天。夜四ツ後より雨。夜半より大雨。四里四町。内浦嶽の麓スクノツペという山の間に休所一家あり。此前に大沼小沼あり。それより四里（合八里半という）鷺ノ木村に七ツ半頃に着、止宿。大野村より少し先に一の渡有り。村上島之允殿在宅に付見舞。

・寛政十二年九月十日 朝より少し晴。夜も同じ。朝六ツ後鷺ノ木村出立。スクノツペにて中食、七ツ半大野へ着、止宿。一の渡、村上島之允殿へ立寄、折りふし他行。此夜、村上氏来り問う。鷺ノ木、大野、道法八里半。

「測量日記」には、このとき、伊能忠敬が間宮林蔵と対面したことは記述されていないが、文化八年（一八一二）十一月二五日に、伊能測量隊が第八次測量に旅立ったとき、江戸深川の富岡八幡宮に見送りにきた間宮林蔵に惜別の言葉として贈った「間宮倫宗に贈るの序」の中に、

今茲辛未の冬、將に発せんとして、余に就いて測極量地の術を問う。是より先、寛政庚申の歳、余も亦命をうけて蝦夷地を測り、中路に倫宗と相見る。是より相親しむこと師父の如し。

と、記している。これによると、伊能忠敬と間宮林蔵との邂逅は、寛政庚申（寛政十二年）の年で、文化辛未（文化八年）の年に林蔵が忠

敬から測天量地の術を伝授されたことがわかる。

なお、林蔵の上司であった村上島之允について忠敬は、「第二次伊豆以北本州東海岸測量日記」の享和元年（一八〇一）五月二五日の条に、

朝晴。六ツ半宇久須村出立。松ヶ坂（又大原峠ともいう）を越て、小下田村に至る。此所より君沢郡なり。それより八木沢村を経て、八ッ後土肥村に着。止宿、名主源八家作もよし。此所にて村上島之允作る伊豆ノ国の図を得たり。と、記している。

これによると忠敬は、第二次測量の時に、伊豆国土肥村の名主源八の家で、村上島之允が作製した「伊豆国全図」を閲覧したことがわかる。

この「伊豆国全図」について、静岡県伊東市在住の郷土史家の木村博氏は、「忠敬が宿泊した源八という家は、当時名主をやっていた。現当主は関健一という方で、その地図は、現在でも関家で保管しており、凡例に『寛政五年癸丑正月』と記してあるので、忠敬が、源八宅に宿泊した八年余り前に村上島之允（秦檜丸・秦檜鷹）が作製したと思われる」と語ってくれた。

二、間宮林蔵の出生

間宮林蔵は、常陸国筑波郡谷井田村上平柳（現伊奈町上平柳）の間宮庄兵衛とクマの子として生まれた。

林蔵の出生年については、今迄、安永四年説と安永九年説との二つがあった。

前者は、天保十五年二月に林蔵が病死した時、上司であった勘定奉行三人が連名で跡目相続に関する伺書を老中に差し出したが、その中

に「当年七十才」と書いてあることを基にして逆算して出生年を算出したものである。

後者の安永九年説は、林蔵の生家の菩提寺である上平柳の専称寺に保管してある過去帳に「耳、六十五才命終わる。四十五か年勤務」と記してあることを基にした説である。

林蔵研究の第一人者である赤羽栄一氏や大谷恒彦氏等は、後者の説をとっている。

三、生涯北方の地の探検や海防の任に携わった林蔵

林蔵の生涯や業績については、明治三十七年九月に東京地学協会から発行された『間宮林蔵』という図書や前記した赤羽栄一氏や大谷恒彦氏等によって記されているので、ここでは、それらの資料を参考に林蔵の足跡をたどってみよう。

安永 九年（一七八〇） 間宮林蔵出生。

寛政 四年（一七九二） 筑波山で立身出世を祈願する。

寛政 七年（一七九五） 岡堰で、堰のやり方を幕府普請役下条吉之助に認められ、江戸に出る。村上島之允に師事する。

買政 一年（一七九九） 村上島之允に伴われて蝦夷地に渡る。

寛政 二年（一八〇〇） 蝦夷の一ノ渡の村上島之允宅で、伊能忠敬と会う。

享和 三年（一八〇三） 蝦夷地御用雇となる。



間宮林蔵の生家（茨城県伊奈町上平柳）

文化 二年（一八〇五） 天文地理御用掛として日高のシツナイに勤める。

文化 四年（一八〇七） ロシア軍艦フオストフ隊が、エトロフのシヤナ会所を襲う。林蔵らが防戦したが負け戦となり箱館に帰る。

文化 五年（一八〇八） 文化六年

松田伝十郎と樺太を探検する。その後林蔵は、再び樺太、東韃靼を探検する。

文化 八年（一八一二） 伊能忠敬の江戸宅を訪問し、測量術を学ぶ。

江戸深川の富岡八幡宮で、伊能忠敬を見送る。

江戸より蝦夷の松前に下向する（十二月晦日）。

文化一〇年（一八一三） 文化一二年

文政 二年（一八一九） 文政 四年

蝦夷地測量

文化一四年（一八一七） 蝦夷地測量の資料を江戸の忠敬宅に届ける。

文政 四年（一八二二） 忠敬の孫・忠誨などの手によって、大日本

沿海輿地全図と実測録が完成する。

文政一一年（一八二八） シーボルト事件がおこる。

天保一五年（一八四四） 江戸本所外手町にて没す。享年六五才。

明治三七年（一九〇四） 正五位を贈られる。

四、忠敬より羅鍼を購入し、樺太探検

文化四年（一八〇七） 四月二四日、ロシアの海軍大尉フオストフの率いる一隊がエトロフのナイボに、続いて四月二八日にシヤナに上陸し、会所の人々と一戦を交えた。主戦論を唱えた林蔵の意に反して味

方は破れ、間宮林蔵は箱館に帰って来る。

同年十月に、伊能忠敬から羅鍼二組を購入した林蔵は、翌年一月に松田伝十郎と共に松前を出発し、樺太探検の旅に出た。林蔵は、宗谷より樺太の南端白主に渡り、六月にラツカ着。そこから引き返して宗谷にいったん帰る。

七月、再度、宗谷を出発し、翌年七月デレンに到着。帰路は黒龍江を下り、十一月に松前に帰着する。

間宮林蔵は、この二回目の探検で、文化六年五月一二日に、「ナニオー」まで北進し、樺太が「離れ島」であることを確認する。

この時の事情について忠敬は、「忠敬先生日記」の文化四年十月一三日の条に、次のように記述している。

資料一 「忠敬先生日記」 一九

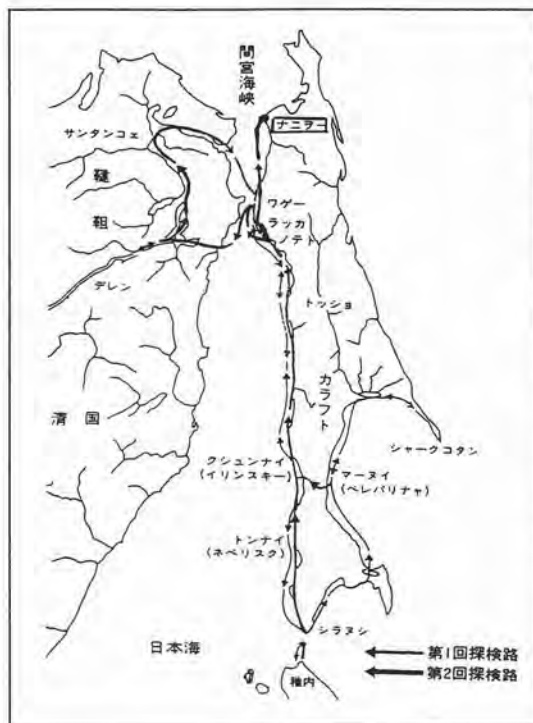
文化四年十月一三日

・曇天。樋富菊郎来る。蝦夷箱館調役下役庵原直一來る。間宮林蔵より羅鍼の儀、我等所持を急に無心致度申来に付、羅鍼二組相渡答、則代金五両請取。

四月二四日エトロフのナイボ、同二八日同所シヤナへ、フロシヤ人狼藉の物語、間宮より伝言。エトロフ役人御吟味役格にて調役菊池宗内、戸田又太夫、関屋茂八、児玉嘉内なり。其節菊池は箱館へ罷越、留守なり。間宮もエトロフに居るなり。去寅カラフトにてフロシヤ人に連れられし内、松前源七と言うものフロシヤ人より日本へ送りし和語を言付られて書きしなり。此夜雨。

又、樺太探検の様子は、村上貞助の協力を得て作成した『北蝦夷島地図』『北夷分界余話』『東韃地方紀行』に詳しく記してある。

間宮林蔵 樺太・東韃探検路 (間宮林蔵「伊奈町教育委員会発行より」)



五、忠敬宅を訪問し、測量術を学ぶ

文化八年(一八一二)四月、松前奉行支配調役下役格に昇進した林蔵は、同年五月一九日に江戸深川黒江町の忠敬宅を訪問する。以後忠敬宅の訪問は、「忠敬先生日記」に記されているだけでも七日ある。この年五月から十一月迄林蔵は、忠敬より測量量の術を伝授された。そして、十一月二五日に林蔵は、第八次測量に旅立つ忠敬一行を江戸深川の富岡八幡宮の境内で見送り、「間宮倫宗に贈る序」を惜別の言葉として忠敬より贈られた。

資料二 「忠敬先生日記」 三二

・文化八年五月一九日 朝より曇天。午前間宮林蔵、午後加藤正作来

る。

- ・六月 二日 朝より晴天。坂部御扶持代金持参。間宮林蔵来る。
- ・六月 五日 朝より晴天。六ツ後所々土用見舞に出る。秋山内記、浅草曆局三軒、御成小路渋谷新之助、支配松平石見守、大手堀田摂津守殿、間宮林蔵、山田綱治郎へ行き九ツ頃に帰着。
- ・六月 七日 朝より晴天。青木来る。間宮林蔵来る。
- ・六月 一四日 曇。村上嶋之允杵村上貞助来る。
- ・六月 二八日 朝晴天。夜も同じ。間宮来る。
- ・七月 八日 朝より晴。此夜間宮林蔵来る。
- ・九月 一四日 晴天。夜、間宮林蔵来る。
- ・十月 朔日 朝より曇。夜晴。夜、間宮来る。
- ・十一月 二五日 朝より晴天。五ツ半後出立。先例の通り八幡参詣。送別の者、間宮林蔵、桜井秀蔵、伊能七左衛門、大川治兵衛、大野弥三郎、佐原の藤左衛門、伊左衛門、妙薫、お利て、三治郎、伝七、藤吉、逸八……。(以下略す)

資料三 「贈間宮倫宗序」

伊能忠敬記念館蔵

原本 漢文、書き下し文 筆者

古人言^イいるあり。曰く、世に非常の人ありて、而して後に非常の功ありと。蓋し非常の功は成り難くして、非常の人は最も得難し。其の非常の人を得るに及べば、則ち非常の功就るべきに庶幾^シからん。寛政の末、覇府群吏^{ハフクシ}をして、大いに蝦夷地を開かしむ。ここに於いて之を海に航せしめ、之を田に墾^{ヒキ}かせしめ、之を指方に教育せしむ。各々奇才士ありて、以て之を慮^{オモシ}る。

野間宮倫宗序

古人有言曰世有非常之人而後有非常之節蓋非常之節
難成而非常之人最難得蓋其及得非常之人則非常之節
焉幾半可就矣寬政之末、爾府令群吏大開服吏地於是
航之於海墊之於田教育之於指方各有奇人方士以慮之
而難要之為地僻在東北隅與北狄相接層冰積寒無粒食
無居室自開闢以來不見教條所存雖欲撫育之由斯臨
也土地之廣蓋不詳其方夷俗之多、無絲毫實政群吏之
所慮事不得其轉者蓋由此矣乎有間宮倫宗者嘗與群吏
俱往來夷地者有年矣而後疏刺筆、身不取爵凡地之所整
設地之所向背悉為焉方以詳其風俗以察其營狀遂到
于北狄隔別之地詣諸人之都隨府而轉其以款有司於是
夷地之詳各可指而處也、爾府傳其功而命之職更入更
是寬政庚申中二歲余亦蒙、命則隨夷地中路與倫宗相見
自是相親如師父今也余職量地特赴北狄倫宗曰君應赴
西列古則入北狄地之相去數千里相別有年數矣猶云一
言以為會期之若余曰俾我倫宗政府大起非常之役非無
其人然如子之所履歷豈常而風化而云哉此地能化何
寒能人外狄內之俗使令不逆而於其長者有優幾何
哉行至倫宗能修善職以裨益政府非常之功乎是為贈言
之詞

文化辛未仲冬

伊能忠敬

而れども蝦夷の地たる東北の隅に僻在し、北狄と相接し、層氷凝寒、
粒食なく、居室なく、開闢より以來教条の存する所を見ず。之を撫育
せんと欲すと雖も、之に躬臨するに由なし。土地の弘袤、其の方を詳
らかにせず。夷俗の多少、其の実を知るなし。故に群吏の慮る所、
率ね、其の帰を得ざる者、蓋し此に由る。間宮倫宗という者あり。嘗
て群吏と俱に夷地に往來すること年あり。而して後、孤劍單身、窮厄
を厭わず、地の盤旋する所、島嶼の向背する所、悉く其の方を窮め、
以て其の風容を詳らかにし、以て其の態状を察し、遂に北狄滿州の地
に到り、清人の都護府を訪う。而して、歸りて具さに以て有司に獻ず。
これに於て夷地の詳らかなる。略々指して慮るべきなり。爾府其の功
を偉として之に職を命じ、更に夷地に入りて、其の方を慮らしむ。
今茲辛未の冬、將に發せんとして、余に就いて測極量地の術を問う。
是より先、寬政庚申の歲、余も亦命をうけて蝦夷地を測り、中路に倫
宗と相見る。是より相親しむこと師父の如し。今や余は量地を職とし
て、將に九州に赴むかんとす。倫宗曰く、君は応に西州に赴くべく、
吾は則ち北狄に入らんとす。地の相去ること數千里、相別るること年
數あり。願わくば一言を乞いて以て会期の符となさんと。
余曰く、偉なる哉倫宗、政府大いに非常の役を起さんとす。其の人無
きに非ず。然れども子の履歷する所の如きは、豈ただに櫛風沐雨とい
うのみならん哉。粒食を絶て、凝寒を犯し、能く人外獸内の俗をして
吾に従いて逆わざらしめて、而して、終わりに其の根実を極むる者復
幾何かあらん哉。行け倫宗、能く其の職を修めて、以て政府非常の功
を裨益せよ。是を贈別の言と為す。

文化辛未仲冬

伊能忠敬

六、忠敬隊の蝦夷未測量地を測り、資料を忠敬宅に提出

第八次測量のため九州へ旅立った忠敬一行を見送った林蔵は、文化八年十二月三〇日、幕府から蝦夷地勤務を命じられ、直ちに江戸を出立した。そのことについて忠敬は、長女・妙薫と長男の妻・リテ宛の書状に、次のように記している。

資料四 「伊能忠敬書状」 一一五 文化九年三月五日鹿児島城下認

・間宮林蔵儀出立後も彼此致世話候よし、深切の事に候。此人、大晦日蝦夷出立之段、高橋氏より申来り候。是は古郷江立寄候事ゆへ、大晦日出立と察し入候。

資料五 「伊能忠敬書状」 一八一五 文化九年十一月八日島原城下認

・間宮林蔵隠密に出府のよし。多分、魯西亜の事と察し入候。此度秀蔵へ、いつ頃江戸着、いつ頃出立之筋、並びに隠密も間に遣し候。

蝦夷地についた林蔵は、文化十年から十二年にかけて（林蔵が、蝦夷地をいつ、誰と、何処を測量したかについての資料は、皆無といってもよいほどにない。従って「忠敬先生日記」と「伊能忠敬書状」より推測）忠敬の未測量地であつた蝦夷の南海岸以外の沿岸を実測したようである。

文化十四年十月二日付の忠敬から長女・妙薫宛の書状に「この程、間宮が孫の三治郎と鉄之助に南部縞手織の反物を持参した」と、記しており、十一月一日付の「忠敬先生日記」に、「夕、六ツ半時頃、間宮林蔵帰着。又、五ツ頃蝦夷会所へ帰る」と記述してあるので、遅くとも十月には間宮林蔵が江戸に帰ってきて、この時、蝦夷地の実測資

料を忠敬宅へ届け、十二月まで亀嶋町の地図御用所で、天文方の下役ともども地図の作製に携わったといえる。

又、文政四年、天文方高橋景保や伊能忠誨などから幕府に上呈した「大日本沿海実測録」の伊能忠敬の序文と凡例（久保木清淵起稿・佐藤一斎添削）に、

・序文 更取間宮林蔵所測、参補地図

・凡例 蝦夷地方測量未完備、故今取間宮林蔵所測、以参補之と、銘記されていることから、「蝦夷地図」は、間宮林蔵の実測資料によって補ったことが明確である。

資料六 「伊能忠敬書状」 一二二二 文化十四年十月二日付

・玉子の直段一ツ拾老文宛の由、致承知候。間宮に七十程もらい候間、当時十分に養生致し候。

此程間宮林蔵より、三治郎と哲之助へ、上南部縞手織の反物二反、土産に致持参候。折角の深切に御座候得共、三治郎、哲之助二十才余迄差置候も、余り延引に相成候。内々能買人も有之候はば、一先売候而、外反物江取替候而は、如何可有之候哉、御相談申入候。無御遠慮おぼし召可被仰聞候。猶追々可申入候。目出度かしこ。

十月二日 東河父

妙薫殿

尚々、間宮も此度は同宿を願、同居致し候間、家内別而賑々數御座候。最早入扶持も、昨日五俵送り申候。已上。

資料七 「伊能忠敬書状」 一二二二 文化十四年十月二十六日付

・玉子六十五歳に落手申候。間宮林蔵より三十五宛両度に七十貫申

候間、玉子十分に相成申候。江戸表は百銅に六ツ位に候。御地は
何程に而御整被成候哉。当分は十分有之候間、跡々は様子により
暮にも春にも可申遣候。

資料八 「伊能忠敬書状」 一三一四 文化十四年?十二月六日付

・此方飯米之儀、間宮林蔵より四斗式升入五俵、本家より津左衛門
船へ拾五俵積入御座候間、来三月初迄は間に合申候。依之、来二
月になり、米拾俵御積入可被成候。

資料九 「伊能忠敬書状」 一五一四

・間宮より三治郎、哲之助みやげに貰候南部嶋之儀、来春御出府に
御相談可申候。

資料十 「忠敬先生日記」 五一

・文化十四年十月一日 曇、午後雨。夕六ツ半頃、間宮林蔵帰着。

又、五ツ頃蝦夷会所へ帰る。

・十月一二日 曇、時々雨降る。夜六ツ半時頃、間宮林蔵来る。日

熊(ヒグマ)の皮一枚、南部縞二反、三治郎、哲之助
へ一反宛。南部鉄瓶壺ツ妙薫へ。

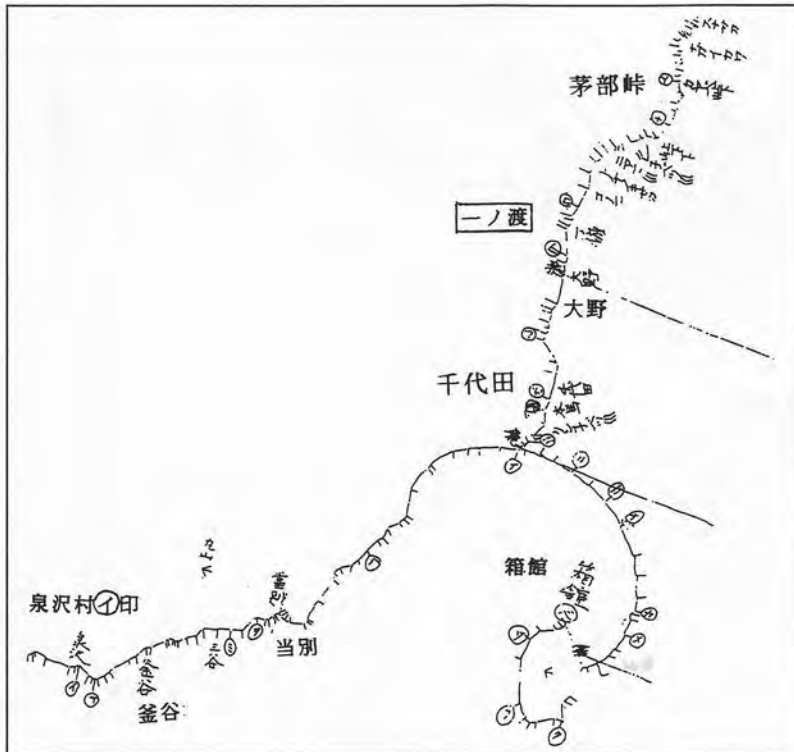
・十月一五日 終日曇晴。午後間宮林蔵来る。

・十月十八日 雨降る。下総津宮蟠龍来る。弥三郎来る。間宮、象
限儀注文す。

・十二月二〇日 晴。間宮林蔵、今日より蝦夷会所へ引越す。

(つづく)

(さくま たつお・元伊能忠敬記念館館長)

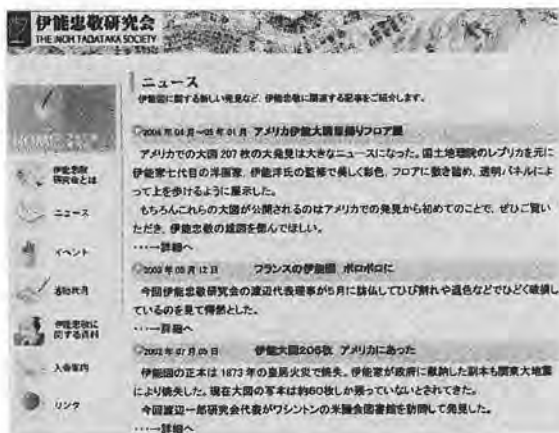


蝦夷地寄せ絵図 箱館・一ノ渡付近 (伊能忠敬記念館蔵)

忠敬談話室だより

ホームページがリニューアル

永年にわたり大友さんに担当いただきましたが、このたび研究会若手のホープ秋場武晃さんをお願いいたしました。二月二八日に新バージョンがオープンしています。十年前の発会から「伊能大図二一四枚史上初の全図公開」までの研究会の歩み、忠敬に関する資料など最新の話題が公開されています。是非一度ご覧下さい。もちろん従来のアドレスや各コーナーとリンクしています。話題を増やしてまいります。どうぞたくさんさんの情報をお待ちしています。



[http//inoh-tadataka.org/](http://inoh-tadataka.org/)
検索では「伊能忠敬研究会」で



・35 / 3 26
「オーーク」のメンバーの外国人だった。マーチを歩いた後、四月一日から53日間の予定。メンバーは隊長の西川阿羅漢、野依六郎、森智彦、遠藤靖夫、金井三喜男、川田茂、小林昌仁さんと金さん。

韓国を下野する議員たち



90年から2年間で日本を1周した「伊旬ウォーク」のメンバーが、今度は韓国を一週する。日韓国交正常化40周年を記念した外務省の「日韓友情年2005」記念事業で、友情の輪を広げようとの思いを込めて「伊旬一週友情ウォーク」と名付けられた。平均年齢65歳の8人が、4月1日から2カ月かけて歩く。韓国ではまだあまり盛んでないウォーキングの普及も兼ねて、各地で地元の人たちとの交流も計画されている。(後藤大樹)

「伊能ウオーク」の8人再結集

[illegible]

金さんの母国 53日で踏破へ

「元中(元寇)の時、野依は日本に
の元中を討つ。野依は日本に
に車社、旧道はななく、
い歩むといふことす。
調査し、歩むといふことす。
への旅路を促すもの、今
回の旅路の二つだ。」
「地方の人たちの一つは、
会いが深み、交易が盛ん
になつてゐる。交通はさ
うなましく、気持はさ
う一野依さんははずで
出舞ひがきれない様
だ。私たちの歩いた
周ルと、将来、國境
人日本が一統にな
キーンするにつにな
ばあひ」

日韓友情の1500日

Saturday Wide

□美しい日本の歩きたくなるみち 500選

全国各地から五百の「歩きたくなるみち」が公表されました。各県10から15ヶ所で、全都道府県から選ばれています。ちなみに千葉県からは①手賀沼と我孫子の歴史を訪ねるみち②千倉の花畑と潮風王国へのみち③佐原の町なみと香取神宮へのみち④市川の歴史と近代文学のみちほか六ヶ所です。お近くの歩きたくなるみちへ出かけてみませんか。

・忠敬にまつわる6月の行事

5日 全日本歩測大会 in つくば

Ⅱ国土地理院（茨城県つくば市）

9日、12日

忠敬江戸入りフォーデューウォーク

12日 伊能銅像ウォーク（富岡八幡宮）

（日本ウォーキング協会「あるけ新聞」）

お知らせ

□新入会員のみなさんです。どうぞよろしく

秋場 武晃さん 東京都三鷹市

プログラマー、ホームページ

馬場 良平さん 佐賀県武雄市

唐津街道、長崎街道研究家

國重 正樹さん 福岡市

国学者青柳種信研究

吉田 一さん 東京都練馬区

「演劇会議」編集委員

大坪 秀二さん 東京都杉並区

元武蔵高校校長

□研究会「旅行」のお誘い

伊能忠敬翁のふるさと佐原を訪ねて

Ⅰ生誕二六〇周年

佐原市記念イベントを期にⅠ

・17年6月11、12日 一泊二日

・集合 佐原市（東京駅から案内）

・会費 一人 一万八千円

（宿泊、懇親会、昼食費用、現地交通費等）

・行程（予定）

6/11（土） 12・00 佐原市集合

午後 記念館、イベント会場、伊能家墓

所観福寺、香取神宮、久保木清淵

墓所、側高神社

宿泊 東庄町鯉屋

6/12（日） 息栖神社、鹿島神宮、潮来、

水生植物園、大根根博物館など

午後 JR成田駅まで送り

・申込 5月25日まで

ハガキ、FAX、メールがベター

電話 福田 0424・24・4568

午後6時以降

事務所 03・3466・9752

留守電に

この計画は佐原支部長の香取さんを中心に進めています。アメリカ大図214枚も再度展示される予定。奮ってのご参加をお待ちします。

□新年度の会員名簿は次号でお送りします。

□訂正 39号・伊能忠誨日記、伊能忠誨宅への来訪者・訪問先で、左記のように多数の誤植がありました。佐久間さんには深くお詫びして訂正いたします。

頁	段	行	誤	正
四六	下	一	永沢	永沢
四六	下	二	両沸	両淵
四七	上	三	謎えし	詠えし
四七	下	一	平有衛門	平右衛門
四八	上	三	目待	日待
四九	上	一六	帰亭	帰宅
四九	下	八	永沢	永沢
四九	下	八	井	井
五〇	上	一八	星両図	星方図
五〇	上	一八	座録	座線
五〇	上	一八	宿録	宿線
五二	下	一一	大田	太田
五五	上	三	伊龜	伊能
五五	上	一三	竜龍ヶ崎	竜を抹消
五五	下	二一	句碑	句碑
五五	下	二三	織乃銘	鐘乃銘
五六	下	二二	忠誨	忠誨
五七	上	五	永沢	永沢
五七	上	五	永沢	永沢
五七	上	六	ばば	ばば
五八	下	一一	持畑	持田

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方にはどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

ー予定ー

発表誌 原則として年四回 64頁

第41号締切 6月末 発行 8月

②例会・見学会の開催

第42号締切 9月末 発行 11月

③忠敬関連イベントの主催または共催

第43号締切 12月末 発行 2月

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄には専門、趣味、入会の動機など御意見を書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万元を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをすべてお送りします。

⑧ (04年8月に事務所は新宿区下宮比町から移転いたしました)

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F

伊能忠敬研究会

Tel・Fax

03-3466-9752

事務局メール

fuku-inh@gj9.so-net.ne.jp

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

投稿規定

会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任。手書き、FD、CDなど形式自由です。一頁は二段組31字×26行(400字詰用紙4枚分)、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等(返却します)添付可。

また、各種情報、近況、話題などお便りをお待ちしています。

伊能忠敬研究会のホームページ

ホームページでは大友さんに永年お世話になりました。今後は新入会員の秋葉武晃さんに引き継がれました。どうぞよろしく。

<http://inoh-tadataka.org/>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図などが御覧いただけます。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書斎、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.ttrim.or.jp/~koko>

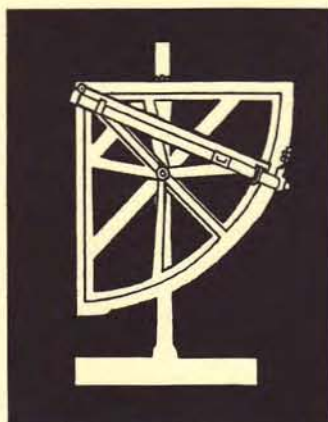
編集後記

例年より寒さが厳しかったせいか、一斉に花が咲きました。いつもご支援に感謝いたしております◇先日老岐、対馬を訪ねました。伊能測量は老岐島一六日、対馬島四八日。宿泊した老岐の西福寺は廃寺、対馬の善応寺は不明。三百年前に出来た対馬の元禄国絵図が県立博物館に大きく掲げられ、説明には「対馬に来島した測量家伊能忠敬はこの正確な地図に驚いた」◇日本の西北端からは朝鮮半島まで五〇*たらず。最近出来た国境トンネルの先に三つ島。「忠敬さんはあの島まで渡って測量したそうですよ」◇県博には以前会報にあった長崎の入江さんの宗家文書『測量御用記録』に関する論集がファイル保存◇今年もアメリカ大図が全国に。五月の連休は鹿児島市で、六月は佐原市。その後十箇所ほど予定があるそうです◇アメリカのハーバード大学図書館からわが会報のバックナンバーの注文が入りました。この40号も太平洋を渡ります◇ラジオ深夜便完全読本に「こころの時代」全リストがありました。会報も総目録をと思っています。応援隊募集(F)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.40 2005



TOPICS

Distinctive Feature of "Exhibition of Inoh Maps" at Nihon Univ.	Imura Hironobu	1
Local Documents about Inoh's Visiting to Sumpu	Shizuoka Shimbun	2
Bicentennial Year of Inoh's Survey	Kato Chuzou	3

ESSAY

Agriculture is Public Service to Keep Scenery and Foods	Watanabe Ichiro	4
FROM VISITORS RESISTERS		
Mr.Suganami, Thank You for your Help	Inoh Yoko	10

MATERIALS

Tadataka and the World at that Time	Kashiwagi Takao	8
Reading Epitaph of Tadataka Inoh	Ueda Kouichi	12
Reading Documents : "Seimonkinkyoruiroku" (7)	Kojima kazuhito	16
Memorandum of Tadataka's Report in Shizuoka	Kato Chuzou	22
Commentator	Sakuma Tatsuo	24
Study of Place Name in Ainu on Inoh Maps	Iguchi Toshio	28
Donated Money by Farmers in Higami	Yokogawa Junichiro	34
Memorandum of Inoh's Survey in Chikuzen	Kawashima Etsuko	38
Introduction of Valuable Letter(2)Watanabe Seizo	Itoh Eiko	42
Circumstances about Abandoning Survey in West Ezo	Horie Toshio	49
Inoh Tadataka and Mamiya Rinzo (1)	Sakuma Tatsuo	56

MEETING ROOM

Editorial Department	63
----------------------	----

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY